

ゲオルク・ジンメル思想における社会的相互作用 概念についての理論的研究：都市空間論の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠原, 雅武 メールアドレス: 所属: 京都大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20180105-052

Title	ゲオルク・ジンメル思想における社会的相互作用概念についての理論的研究：都市空間論の観点から
Author	篠原, 雅武
Citation	空間・社会・地理思想. 8 巻, p.44-75.
Issue Date	2003
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	
DOI	10.24544/ocu.20180105-052

Placed on: Osaka City University

ゲオルク・ジンメル思想における 社会的相互作用概念についての理論的研究 —都市空間論の観点から—

篠原 雅武*

Masatake SHINOHARA*

The theoretical study on the conception of social interaction in the thought of Georg Simmel:
from the point of view of the social urban space

【まえおき】

本稿では、ゲオルク・ジンメル（1858 - 1918）の思想における社会的相互作用概念について都市空間論の観点から理論的に考察することが主要な目的とされる。主として検討されることになるのは、その論考「大都会と精神生活」と、主著『社会学』の第九章「空間と社会の空間的秩序」である¹⁾。それらにおいて展開された、都市生活者個々人の心的生活態度、彼らの間に生じる相互作用、そしてこれらに作用する都市に固有な空間的条件等についての考察を、現代においても通用するもの、最低限踏襲すべき意義あるものと見なし検討することが、さしあたっての課題となる。また、なにゆえに、それらに意義を認めるべきなのか、どういった意味において、それらは意義あるものなのかといったことについて、現代における都市問題との関連において詳述することが、欠かせぬ作業となるだろう。さらにこの検討を踏まえ、彼の為した考察のうち、さらに展開すべきところを見極め、かつ実際にその展開を試みることも課題となる。

論を進めて行くにあたり、確認すべき事項について幾つか、前提として述べておく。

【議論の前提】

1 (I)

ジンメル思想が、都市（殊に大都会）²⁾と密接な関係にあること、それゆえ彼の思想を検討するには都市—生活空間としての都市、すなわち多様多彩な人ともとのが個として各々充たすだけでなく、それら相互の関係もまた充足している空間としての都市—についての考察との関わりにおいて行わざるを得ぬということについては、既に幾人かの者により述べられている。

たとえばマッシモ・カッチャーリは述べる。「大都会の問題、すなわち現代的な実存と、その（大都会の：筆者補足）諸形式との関係についての問題は、ゲオルク・ジンメル哲学の全てが、まさにそこから展開している核心である。印象主義的な註解に、己を制限することなく、この哲学を理解し、その歴史的な意義を首尾よく取り出すためには、この核心から始めなければならない」（Cacciari [1993:3]）と。

あるいはジンメル思想形成の拠点が、大都会ベルリンであったということについては、「彼の息子ハンスは、彼の父が「世紀が転換する頃と、その後におけるベルリンの、小都市から大都会への展開は、

* 京都大学大学院

私自身のもっとも強く拡張的な展開と一致している」と言うのを思い出し語った」(Frisby [1986:69])といったエピソードにもうかがい知れる。ただし、こういった類のエピソードについては、彼が都市生活者であったこと、その生活経験において思想を形成したということを示す一例として、一応の確認事項として触れるにとどめておく。彼の思想が、世紀の転換期におけるベルリンという、特殊な生活環境との関わりにおいてどう展開したのか、その具体的な経験の内容にまで踏み込んで実証的に検討することは、本稿の目的からすれば視野の外にある。

本稿の課題は、ジンメルの、都市生活者としての経験において形成された思想について、理論的に検討することである。すなわち、ジンメルが都市生活者としてどのような経験をしたのか、その経験が彼の思想に対しどのような影響を与えたのかといったことにつき実証的に検討するのではなく、彼が都市生活者として、都市との関わりにおいて得た経験を踏まえてどのような思想を展開したのか、さらに、己れの生活の場であった都市につき、どのように考察を展開したのか、こういった問いに理論的に応じることが課題である。

この課題については、より厳密に述べる必要がある。

ジンメルは、都市において、己の思想を形成しかつ展開させた。都市が彼の思想を形成し展開させたと言い換えることも出来るだろう。ジンメルの思想は、確かに当時のベルリンに特有な、個別的な都市経験において形成された。けれども本稿では、ベルリンとして結実した都市の具体的な内容については視野の外に置き、むしろ、その内容を規定する、都市という普遍的な条件と、彼の思想との関わりにつき考察する。

世紀転換期のベルリンは、普遍的な都市条件に規定された様々な特殊な都市、たとえばパリやニューヨークや上海等の、諸々の都市の一つである。そこにてジンメルの思想は形成された。もちろん、その時代、文化的な背景等からする特殊性ゆえの、諸々の制約はあろう。けれどもこういった制約にもかかわらず、彼の思想を、普遍的な都市の思想の一つとして、かつ、その普遍的な性格からすれば今においても妥当し、さらなる展開の余地を有する基本的な思

想として捉えることも可能である。彼の思想は、都市を出発点とする他の様々な思想のうちの一例、それも先駆的な一例として位置付けられる、こういった考えが本稿の主たる前提を成す³⁾。

また、普遍的な都市条件という概念についても、論を展開しつつ漸次考察を深めて行くべきであろう。

(II)

ジンメルはたとえば、流行や社交、あるいは貨幣や売春等を、都市特有の現象として、生活者との関連、殊に心的生活態度との関連において詳述し、あるいは、フィレンツェ、ベネチア、ローマというイタリアの都市について美学的考察を行っているが⁴⁾、本稿では、このような個別的な諸現象、あるいは美学的な外観についての議論は視野の外に置かれる。むしろこれらを規定する条件、すなわち都市の空間条件について為された考察に、議論の方向が定められる。

ジンメルを都市空間論の先駆者と見なす考えは、すでに提起されている。デイビット・フリズビーは述べる。「ジンメルは、人間の相互作用に対する、空間的なコンテキストの社会的な意義を明らかに示した最初の社会学者であった。…(中略)…社会的な距離、現実からの離脱、「社会圏の交錯」といったことに、ジンメルほどにこだわった社会理論家は、他に居なかった。現代社会の分析においては、これら全てはまず、都市のコンテキストに位置付けられる」(Frisby [1986:71])と。

こういった見解を受け、本稿では、ジンメルが、ここで言われる空間的なコンテキストの意義—すなわちそれが、個々人および彼らが交す相互作用に対し有する意義—を、どのようにして、どのようなものとして明らかにしたのかといったことにつき考察する。この考察は、「ジンメルの、空間の社会学への貢献は、詳しく検討されたこともめったに無く、そしてまた、大都会についての彼の有名なエッセイに関連させられることもほとんど無かった」(Frisby [1992:98])⁵⁾という理論的状况からして有益である。また、その議論を受け、彼自身十分に考察が及ばなかったところにまで理論的に展開すること、すなわち、普遍的な都市空間論—都市生活者と都市の空間条件との相互作用及び相互規定についての理論—の

展開にとっても、基礎的な作業としては有益であると考えられる。

2 (I)

上述のごとく筆者が提起した課題について、考察の方向を定め展開するには、ジンメル思想で、本論からして基本的であり、それゆえ踏まえておくべきことを、概略的に示しておく必要がある。

そのうち殊におさえておかねばならないことの一つは、ジンメルの、社会[Gesellschaft]の定義である。彼は述べる。「社会という統一体がまず存在し、その統一的な性格からその諸部分の性質や関係や変化が生じるのではなく、むしろ諸要素の関係と活動があり、これらにもとづいてはじめて統一体について語ることができる」(Simmel [1890→1989:130=1970:18])と。社会成立に先立って、諸要素が互いに関係し、活動していることが必須であるとされる。さらにまた、「社会はこれら(諸要素:筆者補足)の相互作用の総和にとつての名称にすぎず、それはただそのような相互作用が確定される程度に応じて適用されるにすぎない」(Simmel [1890→1989:131=1970:19])と述べる。すなわちこれら諸要素は、ただ単独で活動するのではなく、相互に作用し合いつつそこにて活動することにより、社会を生じさせる場を成すのである。

ここで言われる諸要素は、たとえば個人である。すなわち「多くの諸個人が相互作用に入るとき、そこに社会は存在する」(Simmel [1908→1999:17=1999:15 (上)])。あるいはそれは集団である。「集団全体が、他の集団と一緒にあって、再度社会を生み出す」(Simmel [1890→1989:131=1970:19])。すなわちたとえば宗派を異とする宗教団体間の相互作用、政策を異とする政党間の相互作用、学説を異とする学者集団間の相互作用等において、宗教、政治、学問の、包括的な社会がそれぞれ生じる。あるいは、学者集団と美術家集団との間等、既存の集団の枠組みを越えたところにおいて社会を生じさせ得る相互作用についても想定可能である。

このようにジンメルは、個人であれ集団であれ、これら諸要素間に相互作用が生じることをもって、社会成立の条件とする。けれども彼によれば、相互

作用はあくまでも、社会の成立条件の一つに過ぎない。

彼は、次の二つの状態を区別する。すなわち、諸個人間に、一時的に生じた相互作用においてはなかなか形成される関係、たとえば「共通な仕事やあるいは会話のための人びとのきわめてゆるやかな結合」等と、「諸個人のあいだの相互作用が、たんに彼らの主観的な状態や行動において成り立っているだけではなく、ある客観的な構成物[Gebild]がもたらされ、その構成物がそれに参与する個々の人格からある独立性をもつばあい」とを区別する(Simmel [1890→1989:133=1970:21])。

彼は、前者においても持続はしないが相互作用は見いだされるのであり、その限りにおいて社会は一応あると述べ、そのことを承認すべきであると述べる。けれど後者の、相互作用の営みにおいて生じ、かつそれでいてそことの関わりにおいては独立している客観的な構成物の形成に到ってようやく社会が生じるとも述べるのである。すなわち「この形体が、無媒介に交渉する主体と彼らの瞬間的な行動とともに消滅する相互作用から、まさにこの(こういった客体物を伴う:筆者補足)相互作用を社会的なものとして区別する」(Simmel [1890→1989:133-134=1970:21])と。つまり、相互作用がただ営まれている状態と、そこに発して独立的な社会的構成物が形成されるに到る状態とを区別する必要があると述べられるのである。

ジンメルは、この構成物の例として、《共通の(個々人の利得等からして)外的である所有物》《認識と、習慣的な生活内容の総和》《法律、慣習、交際の諸形式》等を挙げる。これらについては詳細に検討するなら、物的(具象的)あるいは精神的(抽象的)と、その程度の違いに即しつつ分類することが可能である。共通の所有物にしても、それがものとして触知可能な場合もあれば、知識のように精神的に構成されている場合もあるだろう。けれど、これらは少なくとも、具体的に営まれている相互作用の過程に対し独立しており客観性を持つという性格を共有している。彼によるならこの何れもが、具体的に営まれている相互作用において生じ、かつそこから離れ、さらにその形成に実際携わった者が当の相互作用の場を去った後でも、それとは別の者によ

り相互作用を営ませる手掛かりないしはよすがとして残存するといった性格を備えている。こういった構成物が形成され、さらなる相互作用においても残存している、社会はこの状態において生じるということになる。

けれど、ここで言われる構成物は、個人や集団に先立ち、それらの性質や関係等を、あらかじめ規定するものとは異なる。相互作用において生じ形成される構成物は、たしかにそこの関わりにおいて、独立している。けれど、この独立は、相互作用との関わりにおいて生じることを必須とするのであり、その限りにおいて、常々それと関わりを持つ。すなわち相互作用からの独立は、そこの関わりの喪失を意味しない。

この構成物については、より厳密に考察すべきである。特に、《社会という統一体がまず存在し、その統一的な性格からその諸部分の性質や関係や変化が生じる》という考え方では把握し得ない性格を明瞭にする必要がある。

たとえばジンメルは述べる。「社会の概念と言うと直ぐ思いつく、あの大きな制度や超個人的な組織は、すべて個人と個人との間を一瞬の休みもなく永遠に往復する直接の相互作用が一永続的な枠組みや自立的な構成物に一結晶したものにほかならない」

(Simmel [1917→1999:69-70=1979:22]) と。彼は、ここに認めうる、個々人により能動的かつ受動的に営まれ、さらにそこにて社会が生じる相互作用の過程を、社会化 [Vergesellschaftung] と名づける。客観的な社会的構成物の形成に先立つが、それが発し、まさに形成されるところの相互作用が、これである。

じつはジンメルは、このように、制度や組織と社会化過程とが互いに独立してはいるが関連している状態と異なる事態についても言及している。すなわち、制度や組織が形成されて後、こういった過程との関わりを喪いそれ自体で遊離し、のみならず、この過程そのものに対立的となる、いわば外化する事態もあり得ると、指摘している。「勿論、結晶することによって、制度や組織が独自の存立及び独自の法則を得て、この相互に規定し合う生命に向って対立することもあるだろう」(Simmel [1917→1999:70=1979:22]) というように。すなわち、制度と組織が、現に営まれている社会化活動との関わりを喪い、そ

こから離れたところにおいて独自の法則を得た状態もありうると、指摘される。こういった、制度や組織が、社会化活動との関わりにおいて、それと対立している状態は、それらが社会化活動において形成されつつそこから独立している状態と異なる。しかしながら、ジンメルは、こういった対立的な構成物—営まれている社会化過程からして疎遠な、そこの関わりを喪失したまま残存している構成物—について、十分に考察を行なわない。それが、現に営まれ、新たな構成物を形成する端緒としての社会化過程とどのようにして対立するのか、あるいは、そういう社会化過程との関わりを有している社会的構成物と、それら過程との関わりにおいて外化した構成物とは、共存し得るのか、対立関係にあるのか等々について、議論は深まらず、あくまでもそういう事態もありうると指摘するのである。

(11)

ジンメルは、相互作用において生じる社会化過程について言う。「社会化とは、無数の、互いに異なる様式 [Art] において実現する形式 [Form] である」

(Simmel [1908→1999:19=1999:16 (上)]) と。つまり、相互作用がまさに営まれるところに生じる形式は、様々な様式として実現される。そして様式は無数であり、互いに異なる。その様式についてはたとえば、「共在, 交互的—, 共存的—, 敵対的—行為, 状況の他者との相関」(Simmel [1908→1999:18=1999:17 (上)]) といったものが挙げられる。あるいはさらに具体的に「上位と下位, 競争, 模倣, 分業, 党派形成, 代表, 内部に向けての結合と外部に対する閉鎖との同時性」(Simmel [1908→1999:21=1999:18 (上)]) といったものが挙げられる。こういった社会化形式の様式の諸々において相互作用が営まれるのだが、これら様式が単一で純粋な状態で実現する場合以外にも、複数が混在している状態で実現する場合についても想定可能である。すなわち、《互いに目にすることの可能な領域内に共在しつつ敵対的に行為する》, 《互いに不可視ではあれ状況を同じくしつつ互いに競争しあるいは模倣する》, 《形成された党派が二つ, とともに内向きに結束しつつ外向きには閉鎖的となり, なおかつ互いに敵対的に行為する》といった場合についても想定可能である。

これら様式は、具体的に営まれている相互作用の現場において複数混合した状態で見いだされる形式的な概念である。そしてまた、この相互作用を分析し見極めるための補助的な概念でもある。

このように相互作用の様式が諸々となるのはなぜか。ジンメルはその理由として、個人においてであれ集団においてであれ、実際こうした相互作用へと赴かせるべく働きかける動因としての本能 [Trieb] ないしは目的の違いを挙げる。すなわち、「性愛的、宗教的、あるいは単に社交的な本能、防御や攻撃、遊戯や営利、教えること助けること、その他無数の目的が原動力となり」個々人あるいは集団は、相互作用へ赴く (Simmel [1908→1999:18=1999:15 (上)]) とジンメルは述べる。動因である本能や目的が異なれば、それに応じて営まれる相互作用も異質となり、さらに成り立つ様式もまた異質となる。

なお彼は、ここで言われる諸動因、すなわち本能、目的、あるいは関心、傾向、心的状態等、個人や集団を相互作用へと駆り立て、さらにその様式を規定する動因につき、「社会化の内容、いわばその質料」であると述べている。(Simmel [1908→1999:19=1999:16 (上)]) これらがあって個人ないしは集団は、互いに行為し作用 - 反作用を及ぼしあう関係へと駆り立てられる。けれどもただお互いに行為するだけでは相互作用は社会化の活動にはならない。そこにこれら質料を、その性質に応じた諸々の様式において、形式として実現化させるようになってようやく社会化の活動と成り得、そして社会が生じ得る。社会は、内容により充たされながらそれを形式へと構成する相互作用において生じるのである。内容と形式は、不可分である。すなわち、「現存するいかなる社会的な現象においても、内容と社会的な形式は統一的な現実性を構成し、社会形式はそれぞれの内容から切り離されては存在し得ない」(Simmel [1908→1999:19=1999:16 (上)]) とされるのである。

また、この形式と内容との関係については、次のように述べられる。「社会化の同一形式が、全く異なる内容において、全く異なる目的のために現われ、あるいは逆に、同一内容の関心が、社会化の全く異なる形式において、その担い手あるいは実現化の様式として出現するといったことが見出される」

(Simmel [1908→1999:20-21=1999:18 (上)]) と。形式の様々な様式と、その動因である内容との結びつきは、一定ではない。すなわちたとえば、互いに状況を同じくしつつ協働の形式にある諸個人が、憎悪を動因としていることもあれば、愛情を動因としている場合もあるだろう。これが前者の、形式は同一だが、充足される内容は異なる事態の例である。あるいは、憎悪を共通の動因とする者同士の相互作用が、明白な敵対の形式において営まれる場合もあれば、互いに関わらない、疎遠の形式において現われる場合もあるだろう。これが後者の、形式は異なるが、充足される内容は同一である事態の例である。

これら社会化形式と内容との関わり方については、細心の注意を払って分析し考察すべきである。たとえば二人の個人の間にいてすら、次のように、様々な様式の相互作用が生じる。すなわち、「たがいにまなざしを交しあい、相互に妬みあい、たがいに手紙を書き交したり、あるいは昼食を共にし、またいっさいの具体的な利害のまったくの彼方でたがいに同情して触れあったり、あるいは反感をいだいて接触しあい… (中略) …たがいに着飾って装いをこらしたり」(Simmel [1908→1999:33=1999:29 (上)]) といった具合に。まなざしを交し合う、そこに成り立つ一瞬の社会化過程においてでさえ、愛情あるいは憎悪と、相反する感情のいずれかに充足される二つの異なる場合を想定することが可能である。あるいはまた、求愛あるいは警告と、導く目的も様々であろう。さらに、この交し合いは昼食をともにする最中に生じるかもしれない。つまり、ここで言われる微細な遣り取りは、単一で起こる場合もあれば、複数で混合した状態、同時に起こる場合もあり得る。このように、ささいな営みにおいてであれ、内容と形式との関わり方については限りなく多く状態を想定することが可能である。もちろん、こういった想定作業をただ積み重ねるのでは、不毛な作業となりかねない。けれども、ジンメルの論を踏まえて言うなら、このような相互作用の様々が(たとえそれが、ここに挙げた、ジンメル自身微視的・分子的と形容する過程におけるほどに微細なものであれ)、実際に社会化過程を成すのであり、かつ、ここにおいてもやはり、客観的な構成物としての社会は形成され得るのである。従来は些細と見なされ見過ごされがち

であった相互作用が、実は社会化過程としては、極めて重要であるといった場合についても想定可能と筆者は考える。そしてまた、些細と見なされがちであった要因の、その重要性を見抜く目を鍛えることもまた必要であると筆者は考える。

(111)

本稿の課題は、個々人あるいは集団間で交される相互作用と、まさにそれが営まれている空間、殊に都市との関わりについて、ジンメルの思想に即しつつ考察を展開することである。ジンメルは、相互作用において生じる社会化形式の様式の違いが、本能、目的、関心等、その動因、すなわち社会化の内容の違いによると述べるのであるが、この見解が提示されるその明瞭さと比べてみると、相互作用と空間との関わりについてのそれは不分明で把握し難い。上記の課題からすると、まず、この不分明を彼の論述に即して明瞭とすべく努め、さらに彼自身、考察を十分に展開し得てないところ、つまりはさらに掘り下げるべきところを示す必要があるだろう。

ジンメルは、『社会学』の第九章「空間と社会の空間的秩序」において空間論を展開する。彼による空間の定義は、その最初の数ページにて試みられる。

それによるなら空間はまず、個々人あるいは集団間の相互作用に対し、消極的な規定条件、いわば必須条件 [conditio sine qua non] であるとされる。すなわちたとえば、「人間は、互いに近くに居ることも遠くに居ることも出来ないだろう。空間が、そのための形式を、そこへと与えないならば」(Simmel [1908→1999:687=1999:216 (下)]) と述べられる。個々人の対面的な相互作用が、遠近の様々な度合の距離を介した位置関係において営まれるのに不可欠な場は、空間において与えられる。つまりは空間を欠いたところでは、相互作用の場そのものが成り立たず、相互作用もまた生じ得ない。そしてまた、相互作用を欠くならば、客観的な構成物である社会もやはり生じ得ない。

しかしながら、空間はあくまでも消極的な規定条件であり、積極的な作用を持たぬとされるのである。ジンメルは述べる。「空間はつねに、それ自体では影響を及ぼすことの無い形式 [an sich wirkungslose Form] であり続ける」(Simmel [1908→1999:687=

1999:216 (下)]) と。あるいはさらに具体的に、「空間的な近接あるいは距離が、親しさやあるいは疎遠といった特別な現象をつくるのではない」(Simmel [1908→1999:688=1999:217 (下)]) とも述べられる。つまり彼によるなら、確かに空間は、相互作用を営み関わる個々人の間に、遠近あるいは上下といった位置関係を与え、さらにその関係にて各々に位置を占めさせる。けれどもこの位置関係自体には、個々人における親しさや疎遠、あるいは敵対感情といった心的現象を誘発する作用はないということになる。あるいは彼は述べる。「社会学的な意義を持つのは空間ではなく、むしろ空間の部分の編成と統合と司る、心から生じる作用である」(Simmel [1908→1999:688=1999:217 (下)]) と。すなわち上記の論に即して言うなら、個々人の間において抱かれる親しさや疎遠といった心的要因が、各人に、近接あるいは遠近といった具合の距離を相手との関わりにおいて設けるよう駆り立てる。そうして各人が占める空間部分が、各人間の心的態度の違いに応じて編成される、ということになる。となると、空間、あるいはより厳密に言うならばそこにて与えられる位置関係には、そこを占めている諸個人の相互作用に影響し、さらにその様式を様々に異なるものとするだけの、積極的な規定性はないということになる。

ジンメルは空間に、相互作用に対しては積極的な規定性と認めず、必須条件としての、消極的な規定性以上のものは無いと述べる。本稿で、筆者が殊に問うてみたいのは、ジンメルの、この考え方の是非である。そのためには、さらに幾つか前提として述べておくべきことがある。詳述は、その後改めて行う。

3

筆者はこれまで、ジンメルの思想を、さらに展開可能な潜在性を有する思想と見なし、それがどういったところにあるのか、明示すべく考察を進めてきた。けれど、さらに展開可能な思想とは、逆に言うなら不十分な思想、徹底的に突き詰められることの無かった思想でもある。そういった見方からすると、ジンメルについても、己において潜在しており、それゆえさらに徹底すべきであった思想を、十分に展開し得なかった思想家と見なすことが出来る。ジン

メル思想は不徹底であり、十分に展開され得なかった、だからこそそれに展開すべきであるという観点と、ジンメルが、己の思想を展開させるにあたり不徹底であったという観点と、二つが提示されるだろう。筆者は前者に基づき考察している。けれど後者の、ジンメルを不徹底な思想家と見なす批判的な見解についても検討しておく必要がある。こういった見解もまた、彼の思想の不十分なところを明瞭とし、展開すべきところを把握するにあたって、有益であると思われるからだ。

(I)

ジェルジ・ルカーチは、ジンメルを、「きわめてささやかな、およそ本質とはかかわりのない日常生活の現象に、哲学の相のもとに強烈極まりない視線を注ぐ能力」(Lukács [1911→1971=1986:308])の持ち主、「他の人びとの鈍い精神が無差別な統一を見てきたところに、独特のさまざまな領域を発見する」(Lukács [1911→1971=1986:311])才能の持ち主と見なし、その才知が豊かであると肯定的に評価する。ルカーチはまた、ジンメルはこの才知の基に、彼独特の方法論的多元論があると言う。すなわち、「対象の可能性のかぎりない多様さを、驚きの目を見はりながら認識すること」(Lukács [1911→1971=1986:310])、つまりは対象そのものに即し、そこに多様な観点を見いだし得る限り見いだそうと努める態度が彼の才知の基にあったとされる。

けれどもルカーチは、この態度にはまた「中心の欠如、最終的な確固不動の決断に対する無能力」(Lukács [1911→1971=1986:308])が見いだされると説く。己において中心が、確固不動の決断が欠けているから、対象に、確固たる統一的体系でもって臨まぬ態度が可能となり、それゆえ対象の、多様な相を見いだすことが可能になるとも言えるだろう。けれどもこの無能力はまた、「多様性を発見することは、かれにとっては終極の目標、目的そのものであって、多様に有機化されしかも統一的な体系を見いだすための手段ではない」(Lukács [1911→1971=1986:310-311])というように、彼の思想が十分に展開され得なかった理由であると考えられる。観点は多様に見いだされ、そしてまた認識の対象も、簡潔かつ明瞭に示される。その限りでは対象を、多

様な観点でもって把握しようと試みる、多元論の可能性は提示される。けれどもそこからさらに進んで、「多元論的でしかも統一的な哲学体系」(Lukács [1911→1971=1986:311])へと展開されることはなかったとされるのである。

(II)

ジークフリート・クラカウアーは、ジンメル思想を「類比の思想」と捉え、その特徴、意義、限界につき述べる。

まず、「どんな精神的現象からも、それ自身単独で存在するという虚偽を取り除いて、それが生活の大きい連関の中にどのように組み込まれているかを示すことが、ジンメル的基本的な目標である。その目標をもってかれは結びつける思考と分析する思考を行なう」(Kracauer [1963=1996:204])と述べられる。

すなわち、「かれは、対象の性質や行動様式が新しく発見されるたびに、それが他の対象によっても具象化されることを示し、こうして世界を覆う類比の網を張り広げて行く」(Kracauer [1963=1996:218])。額縁に見出される、内へと向う統一を作品世界においてもたらし、それと同時に外に対する分離 - 閉鎖を日常世界との関わりにおいてもたらず境界という形式は、たとえば都市と田舎のように互いに異なる社会領域を区別する壁(物的な城壁であれ、異なる市域をお互い区切る理念的な境界線であれ)にも見いだされるというように⁶⁾。発見された事柄が、既に発見されている事柄に類比的に関連付けられ互いに結びつけられてゆく。

けれどもこの類比は、何かしら既存の、統一的な体系に基づいて行なわれるのではない。類比の網目の中へと結び付けられることと、統一的な体系へと組み入れられることと、二つを区別しておく必要がある。「可能なかぎり現象の個性をもともに評価することがかれの基本的欲求であるから、客体の特殊な固有存在がもはや認められなくなるような形式に現象を分類して組み入れられることでは、当然かれは満足しない。ジンメルはこの点で、超越的観念論に根を持つ思想家から区別される。つまり後者は目の粗い少数の上位概念で物質世界の多様性を捕えようとするので、まさに現象の多種多様なありようが

網の目をくぐり抜けて失われてしまうのである。ジンメルはかれらとは違って対象にもっと密着する。もちろんこの現実即応をかれは包括的原理の断念をもって購うのである」(Kracauer [1963=1996: 214])。対象を分析するにしても、包括的な観点からではなく、別の類比可能な対象との関わりにおいて、対比されたりあるいは相似の関係におかれるなどして、互いの間に類似や違いが明らかにされるといった具合に行なわれる。たとえば、上述のごとく額縁と都市の壁とが相似の関係に置かれる。あるいはそこに見出される共通の形式(内部に向けての結合と外部に対する閉鎖との同時性)は、扉において見出される形式(内と外とを区別しつつ、それらを互いに結びつける、つまりは区別と結合との同時性)と対比され区別される。新たに見いだされる対象、既に見いだされている対象、それら多様な対象はばらばらでなく、類比の網目との結びつきにおいて把握される。すなわち、いかなる対象であれその特徴は他との類比において見いだされ(単一の顕著な特徴が端的に示されるのであれ、顕著な特徴の複合として示されるのであれ)形式的に確定される。

けれども、こうして類比の網目が広げられ、一見関連を欠くものをも含む多様な事象が互いに関連付けられ分析されてゆくことに、クラカウアーもルカーチと同様、限界を見いだす。すなわち、「かれは世界のいたるところに多様性の複合体を見て、それらを熟知することはできる。」にもかかわらず(あるいはそれゆえに)「世界を満たしている万物に共通の、一つの意味の公分母を見つけることはできない」

(Kracauer [1963=1996:217])と、クラカウアーは述べる。ジンメル思想においては、類比という水平的な展開から、類比において形成された網の目を成す諸対象に共通な一つの意味の探究という垂直的な展開へと到ることは無いとされる。そしてまた、結合され把握される様々な事象についての説明が、見取り図を示すだけのものであり、それを踏まえてどう考えるのか、何をすべきかという方向への、実践的な展開は生じ得ないとも言えるだろう。そういった展開を、そもそも目指していないから、かえって類比の網目が細密化するとも言えるだろう。

ルカーチと同様、クラカウアーも、ジンメル思想のこういった特質が何によるのか、その理由とし

て次のように述べる。すなわち、「この思想家は世界の解釈を差し控える、価値判断する者として現象に立ち向かうことを許す唯一のものである形而上の深みをかれの自己は持たない」(Kracauer [1963=1996:210])と。こういった、ジンメル自身に認めうる精神的態度に、理由が求められるのである。

ジンメルの、そういった精神態度の理由について問うことは、本稿の課題からして視野の外にある。そのためには彼のパーソナリティ、彼の生きた時代背景、思想の状態、あるいはベルリンという都市の当時の状況等につき考察することが欠かせない。ここではただ、彼においてこのような精神態度を認めることが可能であるということを、確認しておくにとどめる。

筆者自身は、彼がこのように、確固不動の決断をもって中心を定めることの無い状態、形而上の深みを欠いた状態にあったのにもかかわらず(あるいはそれゆえに)、ここまで思想を展開し得たことに着目すべきであると考えるのである。ジンメル思想を、そういった意味での深みを欠いた精神態度の者においても、共約可能な意味を見出すことの困難な状態においても展開可能な、多様なものの統一理論の端緒と捉え、さらなる展開を試みるべきであると筆者は考える。ジンメルに即した都市空間論の展開が試みられるのは、この考えのもとにおいてである。

【本論】

ジンメルの、都市についての論考「大都会と精神生活」は、個人と集団、貨幣、分業、都市生活者の心的傾向等、多岐にわたるテーマを巡る、諸々の断片的な考察から成る。それらは、個々関連し一応のまとまりを成すが、それは明瞭な中心を欠き、漫然と読むだけでは、決定的な結論へと至る方向性は見えてこない。雑多な部分的考察のまとまりとして、提示されるだけである。本稿ではこれらを、ただ雑多なままに受け入れるのではなく、決定的な結論を導き出すこと、そのための方向性を示すことが目論まれる。

そのためには、まず前提として、彼の、都市についての基本的な見解を、本稿からして関わりのある

ところを中心と定めつつ明らかにし、さらにその見解の、現代的な意義について検討することが必要である。そしてようやく、その検討を基として、突き詰めるべき点を見定め、展開の方向を示すことが可能となるだろう。

1

ジンメル¹の、都市（およびそこでの人相互の関係）についての見解が明らかに示されるのは、田舎（あるいは小都市）についてのそれとの対比においてである。すなわち田舎においては、人間相互の関係が、比較的小さな集団の圏域内に制約される。これらは小規模であるのみならず、隣接した他の圏域とは互いに強く疎隔された関係にある。この相互疎隔に対応し、圏域内部においては、構成員同士、緊密な結合関係によって制約される。すなわち、構成員においては、個としての独自性や、他によらず、己において担うべき責任ある行動を起こす余地が狭められる。ジンメルは、都市においてはこのような、小規模な圏域が成り立たなくなり、人間相互の、それとは異なる関係の形成が促進されると考える。すなわちまず、都市においては集団の圏域が、構成員数からしても、領域として及びうる範囲からしても、拡大する。それにつれ、個々の圏域内部においては、内向きの求心的な一体性が弛緩する。また、集団相互の関わり、およびつながりが頻繁となり、こうして内と外とを峻別していた小規模集団に特有な境界の画定力が弱くなる。このように、集団個々、およびそれら相互の関係を規定する条件が変容するにつれて、諸個人の動きは活発となり、かつ、そこを離れたところでの個人の独自性、自主性の発揮の余地が拡大する。まずこのように述べられる（Simmel [1903→1995:124-125=1999:186-187]）。

そしてまた、こうして得られた交流規模の拡大および流動化に応じて、都市生活は次のように認識される状態となる。すなわち、「典型的な大都会人の関係と用件は、普通、多様であり複雑である。何より、それぞれ個々別々の利害関係を持ったおびたしい人間が密集しているので、彼らの関係と営為はたがいに食いこみあって途方もなく枝分かれした組織を形作る」（Simmel [1903→1995:119=1999:179]）状

態となる。

さらに、この多様かつ複雑な絡まりあいと認識される都市生活は、つぎのように、刺激の場とも認識される。そこでは、個々人を取り巻く人や事物の「形象が、交互に入れ替わり、急速に、一切合切一緒になって押し寄せて来る。また、その入れ替わりの間隔は急激でありそれゆえ一瞬だけしか把握されない。そして、印象は、予期し得えずして押し付けられる」（Simmel [1903→1995:117=1999:174]）というように。多様で複雑な諸関係は、形成されても安定はせず、後の展開（さらなる形成ないしは崩壊）についても予期し難い。急速かつ突然に消えては現われ入れ替わる事物と人との集積において、それら関係は絶えざる変化の可能性にさらされている。

そこは個々人にとって、その才覚次第では、独自で個性的な形象物を成果として形成するのに適した場である。けれどもそこは田舎と異なり、安定し、持続する関係を形成しにくく、それゆえ根無し草のようにまったく放擲された状態になったり、あるいは雑多で動きの速い環境ゆえに、そこに飲み込まれ、自己喪失の心境に至りかねない場でもある。

このように認識される都市特有の形式的条件が、都市生活者個々人の相互作用を規定するのである。

2

本稿では、主として次のことが問われる。ジンメルの思想を、都市論（都市空間論）の観点からどのように展開すべきなのか。そしてまた彼の思想を、現代的な問題状況においてどのように展開すべきなのか。これらに答えるには、ジンメルの思想を検討するだけでは不十分である。さらに、こう問う必要がある。彼の思想との関わりからして問題とすべき都市の具体的状況とは、どのようなものなのか。この問いはまた、彼により、上述の如く認識される都市の形式的条件が、現代において、十全かつ有効に活用されているのか、活用し得るとしたらどのようにしてであるか、活用されていないとしたら何故その理由なのかと、さらなる問いに到るだろう。これらの問いに答えるためには、ジンメルの思想をまさにそこにて展開すべき現代の都市論の問題状況について、理論的に検討する必要がある。

(1)

スーザン・ビックフォードの「不平等の建設」は、上述の関心からして示唆に富む、極めて重要な理論的論考である。彼女はまず、ジェーン・ジェイコブスによる指摘「如何なる人にとってであれ、大都会においては、知人以上に見知らぬ人のほうが、当たり前である。それは、公共的に人だかりの出来るところにおいてだけでなく、我が家の目と鼻の先においても、変わりはない」⁷⁾をそのまま踏まえ(Bickford [2000:356 = 2001:7])、望ましい都市生活像、いわば理念型を提示する。それによれば、まず、1) 複数の、見知らぬ人の視点観点が多元的同時に在り得、かつ、相互に独立しつつ接触する、いわば過度に親密で無い [non-intimate] 接触が成立すること、そして、2) それら集まりは流動的であること、すなわち、「リスク、不確実性、不完全性に満ちている」こと、個々人にとっては予期し難い、思い通りにならない事態に満ちており、それゆえ刺激が絶え間なく、動きも激しい場であることが、望ましい都市生活の条件として提示される (Bickford [2000:356-358 = 2001: 7-9])。

この理念型は、上述の、ジンメルにより認識される都市の形式的条件と、合致している。けれども、ビックフォードが当の論考において主として問題とするのは、この条件そのものの、さらなる吟味の可能性ではない。むしろ、実際のところ進行しつつあるのが、ここに示された理念型からすると相反する事態であることが問題とされ、それについての理論的考察が行なわれる。

その核心には、現代の都市においては、住民相互の疎隔 [segregation] が進行しつつあるという問題意識がある。

すなわちたとえば、中産階層に属し、なおかつ人種や信条からして多数派 (ビックフォードが例とするアメリカの都市なら白人) の者の集住を可能とする入境規制つき居住区 [gated community] の形成。

「壁に囲まれたこの関門つき居住区では、住民や訪問者あるいは住民のために働く人々が選別され、それ以外の人は近づくことさえできない」(Bickford [2000:358 = 2001:9])。これは、囲われ形成される内部に向けての求心性、壁の外に対しての疎隔、それに応じて住民の、社会的階層、ライフスタイル、人

種等からする同質性の高まり、こういった状態を都市において成立させる具象的構築物である。

あるいはこの逆であるゲッター。すなわち当該地域で少数派とされる者 (アメリカならば黒人など) や低所得者を壁で囲い込むなどして、外との接触を不可能にする。つまりは多数者からする少数者の追放を目的とする物的実践である。「ゲッターが物的に構築されると住民は孤立し、人種の垣根を乗り越える政治的連帯があらかじめ除かれ、こうして政治的な可能性が直接的なやり方で制約される」(Bickford [2000:361 = 2001:12])。この追放により、多様な人との接触機会が制限される。多数派からすれば、接触が危険であると見なされる者をあらかじめ見えないところへと追いやることを意味する。つまり、こうしておけば、少数派が起こすと想定される危険な事態、つまりは不安定要因もまた、多数派の意識においてあらかじめ除去される。

ビックフォードは、疎隔について一般化して言う。「関門は、この場合、疎隔という社会的諸関係を構築し、またそれを表明している。… (中略) …こういった類の関門が機能するのは、ただ或る人々を締め出すことを目的としてではない。人々をお互い分離された各々の側へと割り振ることを目的とし機能するのである」(Bickford [2000:361 = 2001:12]) と。関門の構築という物的な実践により、同質的な集団が形成され、内向きの求心化がその各々において成立し、異なる集団間においては疎隔状態が成立する。本論の関心からすると、このビックフォードの見解については、次の二点を確認しておく必要があるだろう。

すなわちまず、疎隔の進行 (新興住宅地の形成、ゲッターの形成、関門や高い壁など、セキュリティ機能が充実している高所得者向けのマンション街、いわゆる要塞街の形成) という、ジンメルが認識する都市の形式的条件の十全な活用に逆行する事態が現に優位を占めつつあること。集団相互を距てる境界の画定力が、関門や壁により強化される。個人は属する集団外への移動の自由を制限される。外からの、異質な者による刺激は、危険な不安定要因と見なされ、あらかじめその発生の可能性が制限される。こういった事態が進行する。ビックフォードはこれの理由を、次のように列挙する。

彼女はまず、住民の、「公的および私的な空間を純粹にして、怖れ、不快感、不確実性を除去しようという」心的傾向を挙げる。そして、こういった傾向の促進要因として、「住民のノイローゼと偏見」を挙げる。すなわち、多様かつ複雑な諸関係が形成されては喪われてゆく動的な状況に適応出来ず、あるいはそこに身を晒すことを怖れ、そこから己を疎隔しようとする。つまりは形式的な都市条件に適応出来ずそれを拒否する者の心性である。さらに彼女はこういった心的傾向が、「政治的制度的実践や政策により喚起され強化され維持される」と述べる。彼女が望ましいとする都市の理念型の実現を拒むのは、ただ住民個々の心性だけではなく、彼らをして、純化と安全を希求するよう促進する政策でもあるということになる (Bickford [2000:356= 2001:7])。

こういった要因についての詳しい考察は後に譲るが、少なくともここでは、ジンメルが認識する都市の形式的条件、ビックフォードが提起する都市の理念型に対し、その十全たる実現を拒む心的傾向が動因となり、疎隔という社会化形式が異なる集団の相互作用において実現化するという状況が、彼女により問題視されるということを、確認しておこう。

また、ビックフォードは、「現代生活に組み込まれている空間的な諸関係は、(多数派により：筆者補足)望ましいとされる社会的諸関係をただ反映しているだけのものと見なされるべきではない。なぜなら、それら空間的諸関係はまた、望ましいとされる社会的諸関係を生産し形成するからだ」(Bickford [2000:366=2001:18])と述べる。これは、ジンメルの、「社会学的な意義を持つのは空間ではなく、むしろ空間の部分の編成と統合と司る、心から生じる作用である」という見解、あるいは、「空間的な近接あるいは距離が、親しさやあるいは疎遠といった特別な現象をつくるのではない」(Simmel [1908→1999: 688=1999:217 (下)])という見解を問い直すきっかけになる。先にも述べたがこの問い直しは、本稿の主たる課題の一つを成す。すなわちジンメルならば、疎隔を、純化と安全を求める心的傾向の反映とのみ見るだろう。こういった心的傾向ゆえに、異なる集団により占められる部分的領域の相互が、疎隔されつつ編成されるというように。ところがビックフォードは、疎隔の形状について、こういった

心的傾向により望まれる事態—安全を脅かす危険な者、求心的で安定的な関係を壊しかねない者等との関わりがあらかじめ除かれ、同質的な者のみの集まりが形成される—を具体的に促進する実効力を有すると述べるのである。すなわちビックフォードによるならば、関門等がつくりだす《空間的疎隔状態が、人同士の間において、相互に疎遠な現象をつくるのである》ということになる。

(II)

純化や安全を求め、同質的集団を形成しようという心的傾向は、異質な者から逃れ、かつそれらを除外しようとする傾向を、その裏に持つ。この傾向が推進される状況に危うさを見、解決策を講じることの必要を説いた者は、ビックフォード以外にも幾人かいる。

(i)

たとえば、クリストファー・アレグザンダー。彼の論文、「ヒューマンコンタクトを育てる都市」では、社会の都市化 [urbanization of society]、ないしは都市型社会 [urban society] の出現—接触領域が拡大し、その遣り取りが多様になり量的に増加し、それに応じて遣り取りの親密さが希薄化する、すなわち「拡散し、流動化する個人の社会」の出現—という客観的状況において、その趨勢を活かしつつ「個々人が互いに親密な接触を保つためにはどうすべきなのか問わねばならない」(Alexander [1967:74=1967:65])と課題が提起される。そしてまた、この趨勢に適応出来ず、引きこもろうとする心的傾向(自律的—退避的 [autonomy-withdrawal] 傾向)が実際のところ広まりつつあることも問題とされ、議論が展開されるのである。

アレグザンダーも、ジンメルやビックフォードと同様、社会が都市化してゆく状況を不可避と把握し、そしてそこに肯定的な意義を認めようとする⁸⁾。けれども続けて彼は、このような状況にある個々人は、特定の人との関わりにおいて親密な接触機会を維持し、互いが己をさらけ出して信頼関係を築いていくのが困難となりつつあることをも認める⁹⁾。

アレグザンダーは、都市型社会が辿りつつある客観的趨勢は、抗い難いことを認める。それでもなお

かつ彼は、たとえ都市型社会においてであろうと、いかなる個人であれ親密な間柄にある者が、最低限3人か4人は欠かせぬと説く (Alexander [1967:67-68=1967:54-55])。この趨勢に抗うことなく、親密な接触を可能とする社会的仕組みを構想することが課題であると述べるのである。

課題をこう設定し、アレグザンダーはまず、前—都市型社会に機能していた一次的集団(地縁的集団)を人工的に形成しようとする試みを、失敗例として批判する。都市化の趨勢に抗い、「近隣[neighborhood]の考えでもってローカルな一次的集団を人工的に再生しようと試みる建築家やプランナー」について彼は言う。「人工的な手段でもって一次的集団を再生しようという考えは、非現実的かつ反動的である。それは、開放社会についての真理を認識するのに失敗している。開放社会は、もはや場所に依拠した集団を中心としては形成されない。さらに、人工的な近隣の周りに形成されるほんの少しの面識は、やはりつまらぬものである」(Alexander [1967:65=1967:51])と。緑地と団地が整然と並ぶ人工的な村落とされる新興住宅地の造成等、一次的集団形成の試みはアレグザンダーの提起する課題を十分に理解しない、浅はかな解決策とされるのである。

アレグザンダーはまた、こういった客観的趨勢に抗う別の要因として、これに適応出来ない個々人の心的傾向を挙げる。すなわち、「現代の都市型社会に生活する人は、無数のストレスに晒される。危険、騒音、あまりに多い見知らぬ人…(中略)…これらストレスは、しばしばあまりに耐えがたい。そうして人は、それらから退避するのである」(Alexander [1967:77=1967:69])。これは、都市化に固有な多様かつ複雑な人間関係、増大する刺激といった趨勢をストレス要因、危険要因と見なし、それに反応すること自体を避けようとする態度に発する傾向である。これが、アレグザンダーの提起する課題解決にとって、阻害要因とされるのである。

アレグザンダーはこれを、都市化の趨勢がもたらす必然的な副産物と見なす (Alexander [1967:61=1967:45])。そしてこの態度はさらに極端になると—ただ退避するという消極的な段階から拒否という積極的な段階に到ると—彼の言う、自足的個人主義[self-sufficient individualism]の信仰へと到る。こ

れもやはり、都市化が個人にもたらした、副産物であるとされる。彼はこの個人主義について、己とは別の「個人の権利に対する健全な民主的尊重」あつての個人主義と区別しつつ、次のように言う。彼らは「自分自身が外の世界に依存していることを一切認めないし、自分自身と外の世界との相互作用をも一切認めない。なおかつ、彼らは実際、外の世界との相互作用に入ろうとしない」(Alexander [1967:78=1967:70])。自足した、己に固有な範囲以外のところからただ退避するだけの消極的態度に加え、それらを一切認めないという拒絶的態度、強い態度がここに見られる。

この心的態度と、都市型社会の趨勢を活かしつつ親密な接触機会をいかにして設けるかというアレグザンダーの課題提起とは、お互い相容れない。のみならず、これは接触そのものを拒もうとする態度であり、その限りでは個々人同士の相互作用、つまりは社会化過程そのものを生じなくさせる要因と考えられるだろう。

アレグザンダーは、この心的要因を基にして出現する建築環境の一例として、マンションを挙げる。外界拒絶と自足的自律という「こういった傾向は、都会中心部ではアパートという考え方に反映されている。その各部屋は、高い密度で集積してはいるが、ちょうど内部に住んでいる人びと同様に、事実完全に内側を向いている。居住密度が高いために、各部屋を外界から遮断する必要があるし、実際に人が住んでいる場所は、通りから奥まったところにあるので、こうしたアパート地区に住んでいるだけかを、気軽にちょっと訪ねてみることは、実際上不可能である」(Alexander [1967:80-81=1967:74])と。ここでは形式上、ビックフォードの言う疎隔と同様のものが、個々人ないしは異なる家族の間において実現していると考えることが出来るだろう。

また上述の、人工的な一次的集団形成の試みも、やはり疎隔と同形態—同質的な集団を形成し、他の集団との交流を困難にする—と考えることができる。また、アレグザンダーが、都市化に抗う個人に見いだす退避—自足の心的傾向は、純化という、さらに積極的な拒絶、すなわち除外を進めようという段階の、萌芽的傾向と考えることもできる。

(ii)

アレグザンダーの議論においては、社会の都市化という客観的趨勢と、それに適応出来ぬばかりか抗おうとする傾向（人工的一次集団の構築、退避・自足的態度）とが対立させられる。後者については、前者の意義を理解しようとせず、さらにはその十全たる活用を阻む要因であるとのみ述べられる。彼の、この傾向を、社会が都市化してゆく趨勢の副産物でありかつその阻害要因でもあると特定した議論は、確かに示唆的である。けれども、いかにしてこの阻害要因に対処したらよいのかというさらなる議論については、不十分である¹⁰⁾。

リチャード・セネットは、その著作“The Conscience of The Eye”にて、この阻害要因とされる心的傾向そのものについての考察を、彼なりのやりかたで展開している。彼はその序文で述べる。「我々の都市建設で特徴的なのは、人々の間にある差異を、壁で囲って消すことである。これらの差異は、相互にとって刺激的というよりは、相互にとって脅威的と、想定されるのである。我々が都市の領域においてつくるものは、それゆえに精彩がなく、あたりさわりのない空間、社会的接触の脅威を取り除こうとする空間である」(Sennett [1992: 1])と。互いに異なる個人同士、あるいは異なる集団同士を、それぞれ壁で囲って距て、壁のあちらとこちらへと、各々選り分け、相互間の往来、接触の可能性を、あらかじめ除去する。そして壁により囲われた領域の内側は純化され、同質的な者との接触しか起こらない、それゆえ刺激に乏しく、精彩を欠くものとなる。こういった現状にあると、セネットは認識するのである。

こういった現状認識にもかかわらず、セネットは、たとえば1980年代のニューヨークについて、「そこは、格別な諸差異の都市である。すなわち、世界中から人々が集まる都市」でありそれゆえ、想像力を喚起する、刺激に満ちた都市になり得る条件が備わると述べる(Sennett [1992:128])。こういったところからすると、彼が都市を、多様な者の集積地になり得る条件を備えていると考えていることは明らかである。

あるいは彼は、ハンナ・アーレントの議論を踏まえつつこう述べる。「彼女の仕事は、都市の主要な条

件—匿名性 [impersonality]—を、積極的な価値として理解しようという試みである。亡命者は、都市生活者の象徴である。なぜなら、彼あるいは彼女は、かつて後にした場所ではどうであったかということを決して理解しようとしなない他人とやりとりせねばならないからだ。亡命者は、理解しないし理解し得ない他の人たちとの共同生活の基盤を、見つけ出さねばならない」(Sennett [1992:136])と。多様な者の集積地である都市、それは互いがかつて属した共同体の外に出て成す集合のための場である。いわば根無し草である亡命者が集まる都市においては、地縁の共同体は成り立ち難く、また共有された物語といった類の、相互了解を円滑にする媒体もまた成り立ち難い。セネットは、こういった、誰もが匿名的である状況—そこでは《誰が》という、アイデンティティにまつわる問いは意味を持たず、《何が為されているのか、何を為しうるのか》という、行為、活動の実質が問われる¹¹⁾—を肯定的に捉えるアーレントの議論を、都市の形式的条件について考察するにあたり、重要と見なすのである。

セネットは、このように、都市をその形式的条件において把握し、そこに多様な者の集積、匿名性といった特徴を見出し、なおかつそれを肯定する。けれども、彼もやはりアレグザンダーと同様、こういった形式的条件は十全に活用されておらず、のみならず阻害されていると、上述のとおり現状を認識するのである。

セネットはこの阻害要因について、次のように言う。囲われた、精彩を欠く空間の集積である「都市の外観は、晒されること [exposure] への、とてつもない恐怖心を反映している」(Sennett [1992: 1])と。すなわちそこに住みあるいは来訪する者の心的傾向—群集や見知らぬ者のさなかへと晒されることを刺激要因として肯定的に把握しようとせず、むしろ己を傷つけ危険をもたらす要因として否定的に把握しそれを拒もうとする心的傾向—が認められると言うのである。そして彼は、都市生活者にこの傾向が一般化しつつある現状において、どうしたら都市を、その十全たる展開へと方向付け得るのかと問うのである。

この問いは、都市生活者個々人にこういった傾向が拡がるのをいかにして防ぐのか、晒されることへ

の恐怖心をいかにして克服するのか、といったことを巡るものとなる。先取りして言うならば、彼の議論は、都市生活者個々人の心的態度に働きかけて、その恐怖等の傾向の変容を促すだけのものとどまる。つまりは、そういった態度自体の理由が、個々人の心的態度にあるとされ、それを規定し促進する制度的政策的要因についての考察には到らないのである。

たとえば、共感 [sympathy] についての考察に、彼の議論の意義とその限界とが見て取れる。彼は、晒されることへの恐怖、つまりは内向きの心的傾向を克服するには、それを外向きのものへと変えるべく試みる態度が、個人において要求されると説く。そして、この態度は、共感能力の育成により確立されると述べるのである。共感について彼は言う。それは「馴れ馴れしさや、アーレントが考える意味での同情とは別ものである。そうではなくて共感は、互いが互いを気遣うための条件である。それは、人が、自己規定 [self-definition] の力を失うにつれて呼び覚まされるのである」(Sennett [1992:148]) と。ここで言われる自己規定力の喪失については、「己を、不完全なものとして受け入れること」とも言い換えられる。これが共感能力育成のための条件の一つである¹²⁾。さらにまた共感について、次のようにも述べられる。「何かしら、思いもよらぬことが、己の中で説明されず解決もされぬままである、こういった、永続する困惑を受け入れて、そして外へと向うこと。けれどもこれが起こるためには、何かしら、直線的でなく連続的でもない経験が必要である」(Sennett [1992:148]) と。己において形成された既存の経験則（偏見など）に照らして可能な予測の範囲を逸脱する、思いもよらぬ経験（それは突発的であり、つまりは不連続である）を、何であれ受け入れて、たとえそれが説明され得ぬものだとしても、そうであるからこそあえて受け入れる態度を取り続ける、この態度は、先の、己を不完全と見なし続ける態度と一体を成すと言えるだろう。

セネットは、無数の他者との関わりにおける恐怖の克服に不可欠な態度の育成について考察を行なう。けれども、たとえばビックフォードが言うように、彼の議論から導き出されるのは、「危険に対して開かれていること、自己喪失、制御不能といった経験

が重要であると、道徳的に勧める」(Bickford [2000:365=2001:17]) だけのものと、考えられなくもない¹³⁾。このような考え方はまた、個々人において、リスクを負担し責任を負うという態度が育成されさえすれば、上述の傾向は克服され、都市の条件も活用されるという結論に到り、さらに「(他者についての)不安や、(プライバシーや安全を求める)願望が生産されて広められる構造的な要因を無視する」(Bickford [2000:366=2001:17]) ことにもなりかねない。すなわち制度的要因等、巨視的な観点からする考察の姿勢が失われかねない。

個々人に、共感能力を育成し、他者との関わりにおいて外向きに自立するバランスのとれた態度を確立するよう自覚を促す、その限りではセネットの著作は意義を持つ。けれども議論は、それより先へと、個々人の態度自体を規定している社会的制度を問題とし、その解決を試みるところまでは、展開されないのである。

(III)

ビックフォードは、現代の都市において進行しつつある疎隔の要因として、1) 住民の心的傾向、2) こういった心的傾向を促進しかねない政策およびそれにまつわる諸々の制度と、二つ挙げる。

前者については先述のとおり、都市住民の、安全および純化を求める心理、および同質的集団への帰属願望が挙げられる。後者については、次のように述べられる。「ローカルな制度の増加は、民主主義の進展であると、いつも考えられてきた。そして、都市においては、分権化 [decentralization]、および近隣によるコントロールを巡る議論は、いつも、増大する民主主義という観点から行なわれてきた。けれど、…(中略)…分権化は、民主化と同じでない。分権化は自律を、すなわち強制されることなく、他者へと配慮することもなく行為する能力を強調する。ローカルな政府の創造はしばしば「民主化の過程を鈍らせ、歪め、そこから離れていたいと住民が願う兆候」であった」(Bickford [2000:367=2001:18-19]) と。彼女はアメリカにおける様々な事例—分権化の推進と、差別意識、および同質性志向の高まりとが一体的に進行する事態—を検討しつつ、こういった見解を提示するのである。

分権化については、住民の自治能力―地域に固有な事情に配慮し制度をつくるといった能力―が高められる、さらにそこに関わる人々の、地域に対する意識や、あるいはそこでの振る舞いについての責任感も強くなる、あるいは、中央政府に依存することのない、自主独立の気風を養う、といった肯定的なイメージが形成されがちである。そしてこういったイメージが根拠となって、分権化は民主主義の進展と同一視される。

けれども実際のところ起こるのは、個々のローカル集団の自律化独立化だけでなく、それら相互間の疎隔である。そしてまた、分権化（中央政府の統制を逃れること）ゆえに得られた自律の状態が、周囲を取り巻く他の集団との関わり喪失と相俟って、自己閉塞状態となる。すなわち、同質化傾向、集団内部における純化願望が高まる。分権化の推進が、同質的・反民主的集団の成立に到る。ビックフォードは、こういった認識を理由とし、分権化の動向に批判的態度を表明するのである。

だからといって、彼女が、分権化そのものの傾向を批判していると考えるべきではないだろう。むしろ、分権化にまつわる諸々の制度が、その担い手ゆえに十全に活用されておらず、自分たちの安全、純化、同質的集団形成等への願望の実現化に利用されていることを問題視していると考えべきである。集団の自律を過度とすることなく、周囲の集団と関わり連携しつつ、自治を維持することもまた可能であり、そういった具合の自治を推進する制度形成を構想するのも可能である。ただし、制度の十全な活用は、やはり担い手次第であると考えべきだろう。

ビックフォードは、相互疎隔化・断片化の傾向が、分権化政策により推進されると述べるのである。この場合分権化は、脱中央集権化の結果と把握されている。つまりは過度な自律化が相互疎隔の理由とされる。その限りにおいては、解決策の一つとして、再度の集権化、それも、相互疎隔を解消しつつ、それでいて地域の自律性を保持しつつといったバランスのとれた集権化が、理論上提示可能である¹⁴⁾。けれども、そのバランスをいかにして維持するのか、問わねばならなくなる。

以上、論の展開からして不可欠と考えられる事項

を、理論的に検討してみた。本稿の関心に即しつつ、ここから幾つか導き出すとするならば、それはまず、ジンメルにより認識された都市の形式的条件―地縁的田舎的集団の弱体化、立場を様々とする人々相互の複雑な関係の形成、途絶えることなく急速に行き交う人と事物との接触において生じる刺激の増大―が、現代にいたる社会の都市化の趨勢に合致していること、つまりは彼の論が、現代において都市論を理論的に展開するには不可欠な、今においても十分に検討すべき基本的なものであるということである。もちろん、それが発表されて以降、交通機関、情報通信機器等、交流のための媒体は、格段に発展した。それに伴い、人間相互の関係形成はより複雑化し、それが形成され得る範囲も拡大した。また、都市の街路を充足し、そこを行き交う人や事物が発する刺激も格段に増大した。けれど、それらを規定している都市という条件、いわば都市なるものの特質についてのジンメルの理論的見解は、基本としては十分に通用するだろうし、また現代的な文脈においてもさらなる展開可能性を有すると筆者は考えるのである。

さらにもう一つ導き出しうることは、こういった社会の都市化の趨勢に抗う傾向が、疎隔・同質的集団の形成といった具合に、実際に出現しつつあること、さらにこの傾向が促進されかねないという見解である。ここまで主として検討したのは、社会の都市化を積極的に肯定する立場からして意義あるものと考えられる議論であるが、それらに共通して見て取れるのは、都市化の趨勢に抗う諸々の傾向にいかにして対処するのか、その方策を提起しようという試みである。

これら確認事項を踏まえつつ、つぎのように問うてみる。すなわち、ジンメルは、都市化の趨勢が個人および集団に有する意義を、どう認識したのか。こういった趨勢に抗う傾向は、なにゆえに、どのようにして出現するのだろうか。以下、こういったことについて考えながら、再度「大都会と精神生活」を検討してみる。

3 (1)

ジンメルは、人と事物が急速に行き交うことをも

って、都市化の進行の主たる特質と見なす。それが個人に及ぼす影響および意義については、次のように述べられる。「大都会特有の個人類型が、まさにそこから生じるところである心理学的基盤は、神経生活の昂進 [die Steigerung des Nervenlebens] である。それは、外的および内的印象が、急速に、途絶えることなく交替するところから生じ来る。人間は、区別する者 [Unterschiedswesen] である。すなわちその意識は、諸々の一瞬の印象を、先の印象と区別することにより活性化されるのである」(Simmel [1903→1995:116-117=1999:174]) と。ここでは次のことが確認される。すなわちまず、急速に、途絶えることなく事物や人が交替して行く流れに面する都市生活者個々人においては、それとの視覚や聴覚を介した接触、およびそれに対する内からの反応により、それぞれ外から受ける印象、内から発する反応あるいは反省としての印象等、諸々の印象が得られる。その流れの激烈さについては、先にも引用したとおり、「交互に入れ替わり、急速に、一切合切一緒になって押し寄せて来る。また、その入れ替わりの間隔は急激でありそれゆえ一瞬だけしか把握されない。そして、印象は、予期し得えずして押し付けられる」(Simmel [1903→1995:117=1999:174]) と表現される。これに応じて、得られる印象もやはり、同様の激烈さで増大すると言える。神経生活の昂進とは、この状態を意味するのである。またジンメルは、人間を区別する者と見なす。その本質に、区別の能力を認めるのである。さらに、現時点で得られる印象と、それより前に得られた印象とを区別することにより、その意識が活性化されると述べられる。この考えからすると、都市生活者に特有の、神経生活が昂進する状態は、絶え間なく区別することを強いられ、それゆえ意識も活性化され続ける状態であり、その限りにおいては、大都会は、区別する者としてのその能力—得られた印象の各々を、意識的に個別に区別する能力—を高める場として適しているということになるだろう。

また、区別の能力が主要とされる都市特有のこのような精神生活は、知的な特質を持つとされる (Simmel [1903→1995:117=1999:175])。そして、この能力が実際行使されるのは、理知 [Verstand] においてである。理知については、こう述べられる。

「理知の場は我々の心の、明瞭で意識された最も上部の層である。それは、我々の内的な能力のうちで、最も適応力に富んでいる」(Simmel [1903→1995:117=1999:175]) と。さらに、こういった理知的な能力が優位となることにより、その者においては、「現象に対する反応が、最も傷つきにくい器官、すなわち人格の深みからもっとも遠ざかった器官へと移される」(Simmel [1903→1995:117=1999:176]) と述べられる。そしてこの能力は、心情的あるいは感情的な反応、すなわち田舎や小さな町の「ゆっくりしていて習慣づけられていて、一様に流れてゆくりズムを伴う生活」(Simmel [1903→1995:117=1999:175]) に特有な、人格の深みから発する反応と、逆の関係にあるとされる。もろもろの印象を受容し、それらを意識的に区別する能力は、心の、安定的に持続する習慣に依拠する深みから最も離れた表層部分、すなわち印象の激しい移り変わりととまどうことなく適応出来ると見なされる部分において行使されるということになる。

またジンメルは、理知的な能力を、急速に、激しいテンポで移り変わる状況のさなか、まきこまれ、根無し草になる危険から身を守る、保護器官と見なす¹⁵⁾。つまりこの能力が維持され適応のための器官として増強されることが、都市生活者にとっては必須であるということになる。

この、保護器官としての理知的能力については、それが維持されない場合と、維持される場合に分けて、順に考察してみる。

(II)

ジンメルは、この保護器官を保ち得ず、大都会の状況に適応出来なくなっている状態について、それを投げやり [Blasiertheit] と名づけ、次のように言う。「それは、急速に、互いに交替し、対立しつつ緊密に一斉に押し寄せて来る神経刺激の結果である。そこから、大都会的な知性の昂進も生じ来るらしい」(Simmel [1903→1995:121=1999:181]) と。つまり投げやりが生じる基盤は、上述の、理知的能力を高めるのと同様の、大都会特有の昂進する神経生活である。基盤を同じくしつつ、ある者はそれに応じて能力を高め、他の者はそれに適応出来ず、投げやりという状態に陥ると考えられるのである。

ここに言われる投げやりな状態とは、激しい生活状況に晒されるにつれ、「神経が、長い間それらに対して極めて強く反応するよう興奮させられ、ついには、総じていかなる反応を返すことも出来なくなり、…(中略)…反応の、最後の力を受け渡し、そして同じところに留まっても新たに反応する力を蓄える時間が無い」(Simmel [1903→1995:121=1999:181]) 状態のことである。つまり、受容される印象が過多となり、それらに対し分別ある理知的な能力、すなわち区別する能力でもって反応することがおろそかになる状態である。理知的反応を欠きながら、ただ受容するのにまかせる状態であるとも言えるだろう。この反応能力の減退については、次のようにも述べられる。「神経は、大都会の生活の内容および形式と妥協する最後の可能性を、それへの反応の断念において発見する」(Simmel [1903→1995:122=1999:184]) と。理知的な能力の行使が、大都会への適応の一方の極であるとするなら、投げやりは、その正反対の適応と、言うことができるだろう。諸々の印象を意識的に区別する、その能力を維持することが一方の極であり、それらに反応すること自体を断念し、ただそこに、晒されるがまま身を任せるのが、他方の極である。

このように、反応を断念した者においては、次のような状態が見いだされる。投げやりな者は、「事物の区別に鈍感になる。それは、放心した者には事物が知覚されないという意味ではなく、むしろ、事物の区別の意義と価値、さらには事物そのものが、取るに足らないものとして感じられるという意味での鈍感さである」(Simmel [1903→1995:121=1999:183])。彼らにおいては、事物は一応知覚される。けれどもそれらは、各々異なる特性を備えたものとして区別されることなく知覚されるのである。知覚はされても、それは、漠然とした受容としての知覚である。区別する能力は行使されず、印象が、漠然としたままに受容されるのである。

投げやりな者に見られる、外の世界を充足している諸々の対象を、区別することなく一様に受容する態度は、それらに違いを認めぬ態度であると考えられることもできるだろう。この態度についてはさらに、「客観世界総体の価値を低落させることで自己を保持しようとするあまり、ついには己の人格をも同様

に価値が無いという感情へと不可避的に落ち込むのである」(Simmel [1903→1995:122=1999:184]) と述べられる。ここでは、こうして他者を認めぬことを前提に、己を認めアイデンティティを保持しようとしても、それは《退避的に自律しようとする試み》(アレグザンダー)あるいは《晒されることを恐れ、自己拘泥しているだけであり、見知らぬ者との交感可能性をあらかじめ拒む心的態度》(セネット)であるにすぎず、そしてこういった試みが虚しいものであることをすでにジンメルは見抜いていたということがわかる。

既述のとおり、現代的な都市論の理論状況においては、《純化と安全の希求》と言われる心的傾向が一般化しつつあること、さらにこういった傾向が動因となり、疎隔、分離、孤立、集団内部の同質化といった社会化形式が、社会の都市化の趨勢に抗して一般化しつつあることが、問題とされている。こういった理論状況と関わらせてみると、ジンメルが見いだした投げやりは、現在まさに一般化しつつあるとされる心的傾向の、萌芽的なものと言えるのではないかと筆者は考える。すなわち、投げやりな者に特有な、周囲の人や事物の全てを区別することなく一様に受容する態度は、一見寛容なようである。けれどこれは、それらに独自性を見いだそうと努めることなく、平準化されたものと見なし、のみならず、こうすることで己を価値ある者と認め、アイデンティティを保持しようとする、防衛的な態度でもある。一様と見なされた周囲からして己は関わりの無い者と見なす、つまりは自己のみを差別化しようとする態度であると言える。己以外は全て一様と見なし受け入れる、これは表面上受容の態度でありながら、区別の能力を働かせるなら一様と見なしえないはずのところを見ようとししない態度である。それはまた、一様でないものはありえないという拒絶的な態度となりかねない。つまり、投げやりは、自己のみを特権化し、それ以外は皆同じという心的態度となりかねない。

(III)

このような投げやり状態は、上述の保護器官、すなわち押し寄せて来る雑多な印象を理知的に区別する能力が維持され発揮されることで回避される。ジ

ンメルは、この能力が保たれている者においては、ネガティブな態度、控え目な態度が表面上現われると言う。大都会特有の神経刺激を基盤とし生長して来る理知的能力は、控え目な態度として現われると言うのである。(Simmel [1903→1995:122=1999:184]) この態度の、具体的な機能については、こう述べられる。「数多くの人との絶え間無い外的接触に、その都度何度も内からの反応で答えねばならないとしたら、…(中略)…人は、内面的に完全に粉々になり、全く考えられそうにない精神状態に陥るだろう」。あらかじめこういった状態を回避するために、「人は必然的に控え目な態度を取らざるを得なくなる」(Simmel [1903→1995:122-123=1999:184-185]) と。無数の人との外的接触の全てに対し、内から発する反応を一々返し続けるならば、いずれ反応力は消耗し回復不能状態となり、つまりは投げやり状態が生じるだろう。すなわち反応そのものが不可能になる状態が。これを回避するためには、内からの、深みから発する反応と全く異なる反応方式が必要となる。そうして、ポジティブでない反応、控え目な反応が要請されるのである。

この反応については、次のように述べられる。「これら外面的な控え目の内側には、無関心だけではなくて、むしろ意識にのぼる以上に頻繁に、微かな反感、相互的な敵対、反発がある。…(中略)…このような、拡大してしまった交流生活の内的組織全体は、一時的なものであれ、長期にわたるものであれ、共感、無関心、反発の、極めて多様な段階に基づくのである。そしてそのうち無関心の範囲は、表面上見えるほどには大きくない」(Simmel [1903→1995:123=1999:185]) と。それは表面上、冷淡ないしは無関心[Gleichgültigkeit]として現われる。けれど、反応を全く欠く投げやりな態度とは異なる。表立っては反応しているようには見えないが、その見えないところにおいて、かすかに反応している、そういう意味でネガティブに、控え目な態度として現われる。また、交流範囲が小規模な者に特有の、内的な感情に根ざした人格の深みから発する反応方式と異なり、都市生活者は、心の上部の明瞭な層において反応する。そしてこの表層での反応が、外に向けては冷淡な、控え目な態度として現われるのである。

けれどもこの態度は、完全なる無反応とは異なり、その内側に共感、無関心、反発といった、大別して三つから成る情動¹⁶⁾に発する微かな反応を隠し持つ。これが、表面に現われている態度を、裏から規定するのである。人であれ事物であれ、己を外にて取り巻いている諸々の対象と実際に接触し相互に遣り取りするに際しては、この三段階のいずれかに応じた関わりが、成立すると言えるのである。様々な外的対象との関わり方が、この情動による裏からの規定に応じて、その都度区別されるのである。すなわち、共感の度合いが強いなら、相互の間には引かれ合う遣り取りが形式上成立し、逆に反発の度合いが強いなら、背き合う遣り取りが成立するというように。つまり、反応の仕方、あるいは関わり方を区別し、異なるものにするのが、こういった情動による規定であると考えられる。なおジンメルは、この三段階の中間に位置する無関心は、大きな範囲を占めないと言う。つまり、たとえ表面上無関心な態度であっても、それを規定する、意識にのぼらぬ情動は、共感もしくは反感のいずれかを含む。この両極の中心、中立的な状態が保たれるのはめったにないということになる。

これらは、社会化の相互作用の動因、すなわち内容である。けれど、大都会特有の条件、すなわち激しい神経生活の場により規定された内容であり、その限りでは田舎ないしは小さな町に特有の、一様に持続している習慣に規定された感情から発する心的動因と区別される。つまり、これら情動は、表面に現われた控え目な態度を表層的に規定する動因であると言えるだろう。これらが、表面的には控え目に受容される外的対象に発する諸々の印象を、個々各々に区別し判別し、それらとの実際の関わり方を異ならせる保護器官＝理知的能力の、動因となるのである。

ジンメルの見解を踏まえて言うなら、個人が都市化の趨勢に適応していけるかは、こういった保護器官―意識的に区別する能力、控え目な態度を維持する能力―が、十全に保持され得るか次第であるということになる。ジンメルは、この保護器官の生長と都市化の趨勢とが対応していると述べる。「お互いの控え目と無頓着、すなわち大きな圏の精神的な生活条件が、その結果において独立した個々人に最も

強く感じられるのは、大都会の身動きし難い雑踏の中においてである。身体的な近接と過密は、精神的な距離をはうきり見えるようにする。状況次第では、まさしく大都会の雑踏の中にいるときほどに独りで見捨てられた気分になることはないが、それはあきらかに自由の裏側なのだ（強調は筆者）」（Simmel [1903→1995:126=1999:190]）。

ここではまず、身体的な近接と過密という、都市特有の空間条件—さらに、近くに居る者の多くが見知らぬ人であり、その交錯と交替が急速で激しい—が、控え目、無関心といった態度を取らせる—ここでは、精神的な距離の発揮と、空間的概念が用いられている—と述べられている。つまり、大都会の空間的な条件が、保護器官という能力を個々人において発揮させ、控え目な態度を取らせると述べられるのである。また、この保護器官を介し関わる者同士の相互作用については、「直接的には解離 [Dissoziierung] として現れるところのものが、実際には、大都会生活の基本的な社会化形式である」（Simmel [1903→1995:123=1999:186]）と述べられる。つまり、大都会特有の空間条件により形成される能力が実際行使されるところに営まれる社会的相互作用は、離れつつ関わるという、解離と表現されかねない状態において、具現化されると述べられる¹⁷⁾。

この部分を字義通りに解釈するなら、ジンメル自身の「空間はつねに、それ自体では影響を及ぼすことの無い形式であり続ける」（Simmel [1908→1999:687=1999:216 (下)]）という定義と矛盾する。つまりここで言われているのは、控え目あるいはそれを規定する精神的な距離が、まず個人において形成されてそれが作用し個々人の間に身体的な近接や過密といった空間的な位置関係を設かせるということではない。その逆である。すなわち、身体的な近接や過密が個々人に強いる大都会特有の空間条件が、控え目な態度を、保護器官の現われとしてつくりだし、ということが言われるのである。

また、ここではこのような保護器官を生長させた個々人は、田舎や小さな町に属している者とは違い、独りで見捨てられたような感じを抱くかもしれないが、けれど、こういった感覚を抱かせる状態は、独立した、それゆえ自由な状態であるとも肯定的に述

べられている。つまり、「精神的に洗練された意味で、大都会生活者は、小さな町の人間を閉じ込めている視野の狭さや偏見に対立して自由である」（Simmel [1903→1995:126=1999:190]）と、田舎特有の、習慣や持続する感情の鈍い流れに根ざした地縁共同体の桎梏からは自由であると、肯定的に述べられるのである。

4

前章では、ジンメルの「大都会と精神生活」を、都市特有の形式的条件に発する二つの態度、すなわち理知的な態度および投げやりな態度についておこなわれた考察と見なし検討してみた。けれどこれらはどういった都市生活者個々人の心的傾向に関してのものであり、彼ら相互の関わり、すなわち相互作用、そしてまたそのような相互作用において成り立つ社会、さらに、それらと都市との関係といったものがジンメルによりどう考えられたのか、ということについてはいまだ十分検討し得ていない。残された課題はこれである。すなわち、ジンメルが、理知に発する態度の持ち主同士の相互作用、およびそこに成り立つ社会をどう考えたのか、都市空間論の観点から検討し直すことである。この作業は、現代的な都市論の関心事—疎隔、分離、集団内部の同質化—純化といった社会化形式が一般化しつつある傾向に対抗し得る社会化形式、すなわち社会の都市化の趨勢に適合しそれを十全に活用しうる社会化形式はいかにして実現されるのか—からしても有益であると考えられる。

(1)

控え目な態度、より抽象的に言うならばネガティブな態度—意識の表層において感じられる共感あるいは反発を隠し持つ表面上の無関心—に基づく個人同士の相互作用、つまりはそこでの社会化形式については、こう述べられる。「これら（大都会の生活形象において）直接的には解離 [Dissoziierung] として現れるところのものが、実際には、大都会生活の基本的な社会化形式である。隠された反感を上音として伴うこの控え目は、大都会の多くの一般的な精神的本質の形式あるいは外衣として現れる」

(Simmel [1903→1995:123=1999:186]) と。都市特有の相互作用、社会化形式は、解離という、バラバラと見なされがちな様式で、営まれるということになる。

では解離とは、どういった状態のことを言うのか、またこれは、疎隔とどう違うのか、厳密に考える必要があるだろう。

疎隔の様式においては、退避的自律性、あるいは安全・純化への希求が動因となり、ある個人、ある集団の間においては、相互作用が全く営まれぬこと、極端に言ってみるなら、敵対的な遣り取りすらなく、つまりはそもそも関わりを欠くのであるからには、敵としてすら関わり合いになることを拒む状態が実践上目論まれる。つまり、異なる者同士の間において相互作用を欠落させることが目論まれるのである。

解離の様式においては、理知的な区別、およびその区別を規定する情動—大別して、共感、無関心、反感—が動因となる。素朴な、感情に発する反応は、動因とならない。その限りでは、田舎や小さな町での遣り取りに比して素っ気無く、それゆえ全き没交渉の状態と見られかねない。けれどもそこでは疎隔と異なり、相互作用は営まれている。表立っての無関心を媒介に、表層の、隠れたところに生起する、共感か、反感か、いずれかの度合の多寡に応じて、当の相手を友か敵か、重要人物か否か、関わることは有益か無益かといった具合に区別し関わり方を決定しそれにのっとり相互作用を営む、というように。表立っての素っ気無さ、つまりは見かけの解離状態は、あくまでも感情的な要因の欠落に由来する。区別する能力である理知が動因の相互作用は、実際営まれている。

(11)

この、疎隔と解離の違いについては、動因の違いを指摘するだけでなく、さらに空間の問題として厳密に考える必要がある。

ジンメルは、相互作用と空間との関係について、次のように述べる「人間同士の相互作用は、空間を充足することとして感じられる。無数の人間が、規定された空間境界の内部で互いに孤立し住んでいるとき、各人は、その実質と活動でもって直接的に固有な場所を占める。そして己の場所と、己と最も近

い者の場所との間は、充足されない空間、実践的に言うならば、無である。これら両者が相互作用に入る瞬間、それらの間の空間は、充足され、活気付けられるように思われる」(Simmel [1908→1999:698=1999:218 (下)]) と。

相互に疎隔された状態にある個々人、あるいは諸集団の場合、ここで言われる充足されない無の空間は、充足されないままにとどまる。充足されるとしても、相互作用によってではなく、壁や関門によってである。つまり、相互作用が充足するという意味での充足ではない。これは、あえて言うなら相互作用を営ませぬための充足行為であり、その限りにおいては、断絶、分離、疎隔を積極的に推進する営みである。相互作用による充足の可能性をあらかじめ除外する絶縁の営みである。これは間に空いた無の空間、いわば隙間が相互作用に充足されない状態を維持すること、つまりは相互作用による活性化の可能性を剥奪することを意味する。

なお、既述のとおりジンメルは《空間が無ければ、相互作用は営まれない》と述べ、空間による相互作用に対する規定を消極的なものと見なす。けれどもこの疎隔の実践においては、《空間が無いので、相互作用は営まれない》という、積極的規定性へと変容されていると考えることが出来るのではなかろうか。つまり、ジンメルの定義に、疑義を呈することが出来るのではなかろうか。

また、こうして推進される疎隔と対応して、限定的に充足され得る空間—相互作用が許容される空間—が確保される。すなわち疎隔を前提に形成された小集団内部の空間が、そこに属する者によりのみ充足され得るものとして確保されるのである。そこは極めて密度の純な、同質的な者による相互作用のための空間である。

これとは異なり、解離と見られる相互作用においては、各人にとって、直接的に固有な場所を安定的に持続して占めることは困難であり、彼らは、根無し草となりかねぬほどに動態的で複雑な諸関係に直面し、そこへと晒されるのである。この関係の担い手は、理知的な区別に従い、実際に関与する相手を、仕事等、その目的の性質に応じて選別し、そうして複数人と、様々かつ複雑に込み入った相互作用を営むのである。そしてこの場合、相互作用による空間

の充足は、アイデンティティの共有を求めるといった素朴な感情動因を欠く、実践的な充足である。つまり、感情的な動因が除かれ、理知的な区別・選別と実践とが結合したところに相互作用が営まれるのである。

では、この様式で営まれる相互作用と空間は、どういった関係にあるのか。ジンメルは述べる。「大都会では、人は外部の生活形象の複雑さと混乱へとさらされているうちに、絶えることのない抽象、および空間的に近い者への無関心、空間的に遠い者との緊密な関わりに慣らされる」(Simmel [1908→1999:718=1999:244 (下)]) と。ここでは二つのことが述べられており、区別しておく必要がある。

まず、大都会特有の空間条件—ここでは、事物と人の、複雑で、混乱した状態を成り立たせるものと簡略に述べられている—により、抽象、および身近な者へと無関心といった、理知的能力が高められるということ。これについては既述のとおり、空間条件が人に対して影響する、積極的な規定性となし得る状態であると、筆者は考える。

またここでは、こういった状況にさらされ適応していく者においては、ただ身近な者への無関心、すなわち解離と見られる素っ気無さだけが生じるのではなく、空間的に遠い者との緊密な関わりへの慣れもまた生じるのだと述べられる。ただ無関心な、関わりを絶つ態度だけでなく、遠くの者と緊密に関わろうとする態度が認められると言われるのである。これについては、次のようにも述べられる。「知性は、一般的な合意の土台を提供するが、まさにこれにより、人の間に距離を設けるのである。距離は、最も離れた者同士の接近と合致を可能にするのだが、それは、最も近い者の間に、冷たく、そしてしばしば疎遠にする即物性を設けるのである」(Simmel [1908→1999:720=1999:245-246 (下)]) と。身近な者との関わりにおいては、事務的で素っ気無い、心的に距離を設けた関係が成立するのに対し、遠くの者との関わりにおいては、緊密な関係が成立するとされる。すなわち、実際に、距離を介して身体的には離れているのに、この距離が、離れた者の間において身近な者との間以上に緊密な関係を成立させる媒介、すなわち理知的な距離形成の場になるとされるのである。つまり、知性によって設けられる心

的な距離は、身近な者との関わりを疎遠にし、感情的ないざこざを緩和する、いわば緩衝材である。そしてまた、遠くの者との関わりを緊密にする媒体—そこでは、「間接的な交流の手段」(Simmel [1908→1999:717=1999:242 (下)]) が活用されることもあるだろう—でもあると言えよう。

別の箇所ではこの状態について、「空間的に離れている者同士の共属、空間的に近い者同士の非共属」(Simmel [1908→1999:717=1999:243 (下)]) と述べられる。この状態において、相互作用が営まれ、空間が充足されるのである。これは、疎隔の様式における空間充足の状態とは、正反対であると考えられる。すなわち、出自を同じくする、同質的な者との関わりは薄くなり、むしろ、異質な者との関わり、自身が属す集団外部の集団との関わりが濃くなると。「目に見える拮据を超えて、大都会はコスモポリタン主義の場であった」(Simmel [1903→1995:126=1999:190]) と述べられる。コスモポリタンの言葉は、大都会のこういった特質を意味するものとして使われていると考えるべきである。

ただし、このような相互作用が心的な反応および態度にとどまることなく、実際に行為として起こり、かつ空間をどのようにして充足するのかということについては、また別の問題である。すなわちこういった相互作用が、実際に空間をどう充足し、社会的関係をどのようなものとして具体化するのか、こういったことについては別にまた考えてみる必要がある。

(III)

こういった理知的実践としての相互作用において成り立つ社会—都市型社会—について、ジンメルは述べる。「都市の本質には、その在り様の可能性総体からすると、一定の《被構築性 [Konstruiertheit]》があり、それは、より有機的であり、あるいは心理的な意味では感情的である部族原則と、深く対立している」(Simmel [1908→1999:713=1999:239 (下)]) と。また、この直ぐ後で被構築性については、合理性の意味を有するものと述べられる¹⁸⁾。理知的実践の原則に即して営まれる相互作用において成り立つ社会は、合理的に構築されるものと見なされるのである。

では、ここで言われる意味での合理的な都市共同体の原則が、生活空間の構成に際して具体化されるとどうなるか。ジンメルは言う。「都市生活がより純粹に展開するにつれ、それはより合理主義的にあらわれる。すなわち、道路で個的なところ、偶然的なところ、でこぼこしたところ、曲がったところが、まっすぐで、地理的な規範に従い確定された、一般的な法則性によって排除されるところにあらわれる」(Simmel [1908→1999:713=1999:239 (下)])と。つまり生活の場としての都市もまた、そこに成り立つ共同体と同様に、合理性にのっとって構築されるということになる。すなわちたとえば道路なら、物の輸送、人の移動の高速化を目的して整備されるというように。けれど、ここで言われる合理性の意味については、厳密に考える必要がある。

押さえておくべきことはまず、この合理性が、ジンメルの言う意味での理知的能力を前提とすることである。この能力は、社会の都市化という現実的な趨勢に、刺激され、促され、そしてそれへと適応しようとする者において高められ行使される。つまりこの趨勢を離れたところ—たとえば、適応出来ず投げやりになったり、あるいは田舎等、前都市型社会の原則に固執したりするところには生長し得ぬ能力である。つまりは退避的・自律的傾向の者、一次的集団の形成を試みる復古的な者、晒されることを怖れる者、そして安全・純化を求め疎隔を推進しようとする者においては、この能力は生長し得ぬと言えるだろう。この能力を共有する者同士の結合原則が、部族的、すなわち出自を同じくする者同士の、地縁的・血縁的結合原則、有機的・心情的原則と相反するとされる場合にも、後者の原則が都市型社会に適合しないこと、その趨勢を反映し得ぬ、それゆえ実践的な効力を持たぬという認識がその前提にある。

また、その被構築性も、都市型社会の趨勢に即した理知的実践に発する能動的試みを前提とするのである。曲がっていたり、偶然に委ねられたまま放置された、自然な放恣な道の状態、つまりは自然発生的な状態が改変されるに際して適用される確定された合法則性は、理知的実践において見出された合理性に即したものである¹⁹⁾。実践の現場を離れたところにおいて恣意的に形成される空理としての法則²⁰⁾とは、全く異なる。

【今後、理論的に展開してゆく余地のある幾つかの事項について：制度と空間】

1

さらに行なうべきことは、都市特有の社会化過程—理知的実践を動因とし、《空間的に離れている者同士の共属、空間的に近い者同士の非共属》という様式で営まれる相互作用が集積すること—において形成される客観的な構成物、すなわち、「参与する個々の人格からある独立性をもつ」(Simmel [1890→1989:133=1970:21])「永続的な枠組みや自立的な構成物」(Simmel [1917→1999:69-70=1979:22])についての考察である。ジンメルの論から導き出されるのは、こういった構成物は、相互作用において—たとえそれが投げやりでなく、理知的実践に発するのであれ—営まれていればおのずと形成されるといった類の、自然発生的なものではない、という見解である。構成物としての社会は、まさに営まれている社会化過程との直接的な関わりを離れて、そこと独立の関係にあり、かつ制度や組織を合理的な原則—この合理性は、理知的実践を離れては空疎となるのだが—に基づいて形成し備えるものと考えられる。

ジンメルの限界がこのあたりにあることについては、フリズビーが指摘している。たとえば、ジンメルは社会的分化を、小規模な集団、すなわち構成員に独自の個性の発揮を許容しない同質化傾向の強い集団からの解放として、肯定的に把握する。けれど「社会階級の分化、あるいは公的空間と私的空間への分化に関心を持つことはない。…(中略)…大都會的な実存と、流通および交換の領域との相関関係は、都市の文脈における社会階級の分化の吟味へと、直接的には必ずしも到らない」(Frisby [1992:116])と述べられる。社会的分化は、相互作用形式としてのみ把握され、そこに発して形成される社会的構成物に位置付けられることはない。そこに見いだされ得る、階級分化、公私の分化としては把握されぬということになる。

確かにジンメルは、都市特有の社会的分化について、小集団の、他の集団との相互的交流が頻繁となり、その自然な境界画定力が弱まるにつれ、特有の直接的な一体性が弛緩した結果と見なし、かつ、

そこからの解放ゆえに得られる個人の独自の能力の発揮機会として、肯定的に把握する (Simmel [1903→1995:124=1999:187])。

けれどもジンメルは、都市では分化が、分業となりかねないこと、個性の発揮が、小集団とは別の桎梏により抑制されかねないとも認識するのである。

「大きくなればなるほど、都市はそれに即していよいよ多くの、分業の決定的な条件を提供する。それはその大きさによって、この上もなく多様でおびただしい業務を受け入れることが可能な領域だが、同時に、個人がひしめきあいながら顧客を求めて争うとなると、一人一人が特殊技能を身につけざるを得なくなり、それを得さえすれば個人は、そうやすやすと他人に迫いのけられずにすむのである。」

(Simmel [1903→1995:128=1999:193]) 個人は、他の者との違いを際立たせるために、自身において、或る一つの能力に限定しそれだけを高めようとする。けれどもこの試みが極端になると、次のようにもなりかねない。「特殊化された業務の各々は、個々人に、より個別化された能力を要求する。それがさらに高まるにつれ、総体としての人格は、たいてい価値低落するのである。」 (Simmel [1903→1995:129=1999:196]) つまり、個々人各々の、一部の肥大化された能力の発揮において形成される仕組みが組み合わされて出来上がる総体的な組織は、逆に個人の一部の肥大化を要求するものともなりかねない。そういった状況における個人は、「無視し得る量 [quantité négligeable] へと格下げされかねない」 (Simmel [1903→1995:129=1999:197])。

このようにジンメルは、社会的分化という現象において、互いに異なる二つの側面を把握する。けれども、この把握はあくまでも把握にとどまり、社会階級の分化、さらには支配 - 被支配の関係という社会的構成物に即した考察へと導かれられないのである。あくまでも「対象の可能性の多様さを認識する」だけであり、それに対して「価値評価する者として立ち向かうことはない」。ルカーチおよびクラカウアーが見出した弱点は、こういったところにも現れているのである。実際、「大都会と精神生活」の末尾には、こういった大都会の現状に組み込まれている者の務めについてこう述べられる。「われわれのなすべき務めは、訴えたり許したりすることではなく、ただ

理解することだけなのである」 (Simmel [1903→1995:131=1999:200]) と。

カッチャーリは、このようなジンメルについて、ただ価値評価の欠如だけでなく、批判的姿勢の欠如をも見、さらにはそれが現状追従的な態度ともなりかねないと、以下のように述べる。すなわち、ジンメルの、こういった論理に従って推論するとなると、「分業は、個性への個人的な要求をますますよびさますということになる。その結果である疎外は、昔ながらの『社会集団』から個人が解放されるという事態において、イデオロギー的にかき消される」 (Cacciari [1993:11]) と。この考えを敷衍するなら次のように言えるだろう。すなわち、田舎特有の小規模集団とは異なり、個性の伸張を可能とする開かれた空間という都市において見だし得る一つの側面が過度に強調され、それにより、分業による疎外、個人の限定的な能力の肥大、あるいは公的空間と私的空間の境界線の不分明といった他の側面が隠蔽されかねない。あるいはジンメルを読む者においては、社会の都市化に付随するこういった側面を負の側面と価値判断し批判的に考察する姿勢が失われかねないとも言えるだろう²¹⁾。

こうやって、ジンメルの思想における価値判断の欠如を、彼の弱点の一つとして改めて認識しておくのは、本稿に発して後々研究を展開するに際し、幾つかの観点からして有益であると考えられる。

まず、本稿で主として扱った、神経刺激に対し理知的に反応する態度と、投げやりになり反応を拒む態度との関係について。ジンメルはあくまでもこれらを二つの類型として示すのである。筆者が行なったように、投げやりを克服すべき態度と見なす価値判断は下されない。投げやりはただ、都市化の趨勢に適応し得ぬ一類型として示されるのであり、それ以上の、克服すべきものとはまでは言われない。筆者は、セネットやピックフォード等、投げやりに発する諸々の態度を克服すべきとする価値判断を踏まえ、それとは別の態度を模索すべくジンメルを読んでいる。けれど、この価値判断の是非については、十分な検討を行なってこなかった。

この判断の是非については、今後十全に論じる必要がある。そうでないと、ピックフォードが理論的に認識する現状—都市では疎隔が進行しつつあるこ

と、それを是とする心的傾向、すなわち純化と安全を希求する心的傾向が蔓延しつつあること、さらにこういった傾向と相俟って分権化政策に発する制度的状況が、ローカルな排他的共同体の形成を助長しかねないこと—において、これと異なる状況を対抗的に形成してゆく試みを正当とすることが困難となりかねないからだ。

ジンメルを読むことにより少なくともこういった疎隔的实践の動因である心的傾向の萌芽形態、すなわち投げやりを明瞭とし、そしてこれに対抗的な実践の特質および可能性—その動因である理知的能力、遠くの者とのかかわりを選択的に緊密にしていく、いわばコスモポリタンの社会化形式—を示唆することは出来た。こういった作業を踏まえさらに行なうべきことは、投げやりを、純化、退避的自足的傾向、他へと晒されることへの恐怖に発する安全願望の昂進の根本に位置付け、それへの批判を継続すること、その克服の可能性、対抗の可能性がどこにあるのか見出すこと、さらには、これら一般的な諸傾向に比して数少ないがそれらに対抗的に営まれている社会化過程に相応しく、それを促す制度的仕組みを構想することである。けれどもこれらの作業は、ジンメル論の範囲を越えており、別途に取り組むべきである。実際彼は、価値判断の根拠を示さない。また、彼の論は社会化過程についての考察が主であり、それに発してそこから離れて独立に形成される制度的構成物については十分に考察されていない。投げやりについても、彼の論はあくまでも描写的なものであり、さらに心理学的ないしは精神病理学的に深めていくことの可能な雛型である。

こういった作業は、理論的な課題であるのみならず、実践的な課題でもあると考えられる。具体的な状況において、社会化過程の対抗的な二傾向を実際に見極め、その見極めの是非について判断し、また、望ましからざる傾向を抑制しつつ、なおかつ望ましい傾向を促し、それに相応しい制度を構想しようという試みが、不可欠であると考えられる。これらは、本論に発しつつその範囲を越える、さらなる課題である。

2

残された課題は、もう一つある。社会的相互作用と空間との関わりについて、考察を突き進めて行くことがそれである。ジンメルは、空間を、それを欠いては相互作用が営まれ得ぬ、その限りでは不可欠であるが、それ以上の、相互作用の営まれ方を規定するほどに積極的な作用は持たぬ消極的条件であると定義する。けれど、都市空間論としてその議論を検討すると、こういった定義に反することを彼自身考えていたのではないかという推論が成立可能と考えられると、本稿で筆者は幾度か述べたのだった。ジンメルは、あからさまには述べていない。けれど、彼の議論において空間は、消極的規定性だけでなく、積極的規定性をも備えるものと把握されているのではなかろうか。

筆者の推察が適か不適か、より厳密に考察する必要がある。そうすることで、社会的相互作用概念を、社会化形式と社会化内容とがあわさるものとしてだけでなく、空間と関わるテーマとして論じ直す端緒になるとも考えられる。また、都市空間についてジンメルが挙示した諸々の特性を概念的に検討し直すこと、それが社会的相互作用および個々人の振る舞いにどういった影響を与えるのかと問い直すことのきっかけになると考えられる。もちろんこれは、別途の論考に譲るべき壮大な課題であり、詳述は差し控える。ここでは、今後考え論じて行く課題の一端を示すにとどめておく。

ジンメルに、微視的社会理論の萌芽があるということについては、先に述べた。目配せする、手紙を書く、昼食をともにする、装いに工夫をこらす、こういった日常生活の随所に見られる些細な遣り取りにおいても、社会的相互作用が成立する。遣り取りの内容の、一見極めて些細な違いが、全く異質な社会化形式を成立させる、このようにジンメルは考えるのである。こういった遣り取りについてのさらなる微細な考察は、『社会学』第九章の中、「感覚の社会学のための補説」と題された箇所を試みられる。

この部分で、特に注目に値するのは、目および耳についての考察である。これら伝達器官に備わる器質的な役割—見ることと聞くこと—が違うため、そこに成り立つ相互作用もそれぞれ異なる様式を取る

と述べられるのである。

目については、このように考察される。目は、お互い見つめあう個々人を結びつけ、そこに相互作用を生じさせる。この見つめあいには、「最も直接的であり純粋な相互的関わりである。…(中略)…けれど、目から目へと交される眼差し [Blick] が人を織りあわす、こういった最も生き生きした相互作用は、客観的な形象物へと結晶しない。それが人の間に設ける統一体は、直に出来事の中にとどまり、その働きの中へと溶解する。そしてこの結合は、とても強くて繊細であり、目と目の間の最短直線に担われ、ほんの僅かの逸脱、僅かの脇見さえ、この比類ない結合を壊すのである」(Simmel [1908→1999:723=1999:249 (下)]) というように。見つめあう個々人の間に成り立つ関係は直接的かつ純粋である。また、それは互いにしっかり見つめあう瞬間にのみ生じ、しかも生じることそのこと以外には何も生じない、すなわち生じる瞬間の後になってそれがあったと改めて確認可能な客観的な痕跡をその場に残さない、目による相互作用についてはこう述べられるのである。その特質とされる直接性、純粋性、瞬間性については、厳密に考える必要があるだろう。

また、その遣り取りの双方向性 [Reziprozität] が、さらなる特質として挙げられる。すなわち「他者そのものを受け入れる眼差しにおいて、人は己を表明する。主体が客体を認識するのと同じ行為で、客体に身を委ねるのである。人は目によって、同時に与えることなくしては受け取ることが出来ない」(Simmel [1908→1999:724=1999:249 (下)]) と述べられる。与えることの能動性と受け取ることの受動性とが、見つめあう、一つの行為に同時に生じる。成り立つ行為の瞬間においては、これら相反する方向にある伝達行為は混在し、はっきり区別され難い。

耳についてはこう述べられる。「耳は、完全に利己的な器官である。それは受け取るだけであり、決して与えない。…(中略)…耳は、口および言葉を伴うことでようやく、受け取ることと与えることの内的に統一された行為を生じさせるのである。しかしながら、これらが生じるのは、聞くときにはしっかり話せず、話しているときにはしっかり聞けないという、二者択一的な交互性においてである」

(Simmel [1908→1999:730=1999:256 (下)]) と。単独では耳は、聞く器官、すなわち受容器官としてのみ機能する。これが個々人の間に相互作用を成り立たせるには、発信のための器官である口、およびそこから発され声で伝わる言葉によって補われることが不可欠である。これらを欠くと、ただ聞くだけの、受動的な作用しかなく、遣り取りの遣る側が欠落することとなる。また、耳と口とが相補って相互作用を成り立たせても、これは目と異なって、話す - 与える役割と、聞く - 受け取る役割の二つへと担い手が分化させられ、その役割をお互い交代する状態で成り立つ相互作用である。つまり、遣り取りは一瞬でなく、交代しつづける時の経過において漸次的に進行する。

こういった見解をうけて、言葉を発し聞く遣り取りは、見るという、直接的で純粋とされる遣り取りに比して作為の余地が大きいと、考えることができるのではなかろうか。すなわち、その遣り取りにて求められるのは、伝達を的確にするために話し方聞き方を精密にすること、つまりは目での遣り取りにまでは及ばなくても直接かつ純粋な度合を高めることだけではない。むしろ、話し伝える内容の性格に応じ、強調したり、曖昧にしたり、隠したり、話し方を巧みにすること、そして、それに応じて、相手の言葉にされた内容だけを言われたとおりに受け入れるだけでなく、その語調、話される展開、隠蔽のためのボカシ、あるいは誇張など、微妙なニュアンスを聞き分けて、言われていないところにまで考察を進める技法を高めることもまた、求められる。見る場合においても、やはりこういった遣り取りの技法—たとえば目を逸らす、上目使いをする、わざと怒った顔をする—はある。けれど、この場合、声色に比して作為の余地が少ないのではなかろうか。

筆者のこの推察を補強するのは、ジンメル次のような見解である。目により発され受容されるもの、耳により受容されるもの、および両者の違いについてジンメルは述べる。「我々が、人において見るのは、そこに持続するもの [Dauernde] である。顔つきにおいて示されるのは、…(中略)…その者の生活の歴史である。…(中略)…我々が聞くのはその瞬間であり、その本質の揺れ動きである。様々な二次

的認識と推論が我々に、その動きにおける瞬間の気分を明らかにし、その言葉における変らぬものを明らかにする」(Simmel [1908→1999:729=1999:254 (下)]) と。

見つめあいの相互作用において伝達されるのは、その者において持続するもの、過去からの、生きられた生活の軌跡として刻まれたものの表現としての顔つきである。別の箇所ではこう述べられる。「表現器官として把握される顔つきは、いわば完全な観照的本質 [theoretischen Wesen] であり、それは、手や足や、身体全てのように振舞わない。それは、人間の振る舞いを、内的にも実践的にも担わない。むしろ、それらについて語るだけだ」(Simmel [1908→1999:725=1999:250 (下)]) と。つまり、表情の作為的な表現は、二義的である。こういった作為の有無とは関わりなく、時々刻々と推移する状況に左右されずに持続しており、そこにただ示されるものとしての顔つきが、目により受容されるということになる。

耳についてはこう述べられる。それは目とは違って、状況の推移に応じ変るもの、揺れ動くものを受容する。すなわち、「個々人の豊富に多様な感情、思考と感情の流れと瞬間的な高まり」(Simmel [1908→1999:732=1999:257 (下)]) を受容すると。

こうやって聞かれることで受容された相手についての印象は、そのままでは雑多で、なおかつ遣り取りにおける作為ゆえ、当の相手の本質を見えにくくするものとなりかねない。それゆえこれを補って、相手の変らざる本質を探り出す推論が不可欠となる。この推論においては、目による受容の働き一声と言葉の作為によって偽って表明された相手の実質を見抜く働き一が、役立つことになるだろう。

また、耳により受容される印象は、ただ相手の本質を見えにくくするものでなく、その本質について、見ることによって得られた見解を確かとするもの、あるいはまたその置かれた状況における瞬間的な変化、揺れ動きの推移をも把握することで、その相手との関わりを適切に維持することに役立つものと考えられる。すなわち、相手について目により得られた、変らざる本質とされるものについて、強固な偏見へと陥りかねない態度を緩和すること、そして、実際対面し、言葉を声にし遣り取りする中、状況の、

絶えざる推移に規定され振舞う当の相手の変化について、これが本質を隠蔽するための作為的な変化なのか、それとも状況に左右されたがゆえの不可避免な変化なのかを区別しながら把握しようと努める、実践的な試みに役立つと考えられる。

ジンメル自身、目と耳は役割を分担しており、相互補足の関係にあると述べているのだが (Simmel [1908→1999:729=1999:254 (下)]), この見解を踏まえるならば、今述べたようにそれぞれの役割において足りないところ、欠陥ともなりかねぬところを補強しあうものと、考えを展開することができるだろう。

これら、見ることと聞くこと一話すことの、それぞれに特有な相互作用形式と、互いの補強関係についてはより厳密に考察する必要があるが、一応まとめると次のようになる。目は、見つめあう、一瞬の相互作用において、当の相手の本質把握に向かう。耳は、話し手と聞き手が交互に入れ代わる会話、すなわち時間をかけて展開され作為の余地を含む遣り取りの展開において、瞬間瞬間の推移に規定された声に聞かれる相手の気分の浮沈流動等を把握する。そして、目による本質把握の、偏見への凝結を緩和するのが耳による働きである。また、耳による状況把握が、過誤へと陥ることを修正するのが目による働きである。

では、こういった目と耳による微視的な相互作用の、大都会に特有な営まれ方について、ジンメルはどう考えたのか。ジンメルは、次のように述べる。

「大都会における交流は、小都市における交流と比べてみると、他者を聞くことに対する、他者を見ることの計り知れない優位を示す」(Simmel [1908→1999:727=1999:252 (下)]) と。つまり大都会においては、目と耳の互いの補足状態は、維持し難いと認識されるのである。ジンメルは、このようになる原因として、公共交通機関の発展を挙げる。すなわち、直ぐ後続けてこう述べられる。「小都市における路上での出会いは、比較的大きな割合で知人と関わるものであり、そこに人は互いに言葉を交わす。あるいは見つめあうことで、表に目立つにとどまらぬ総体的な人格を、互いに再現するのである」という状況と異なり、大都会にて運行中のバスや鉄道や路面電車の車内においては、「人は、数分から数時間

にかけて、互いに言葉を交わすことなくお互い見つめあうことが出来、あるいは見つめあわなくてはならない状態」に置かれると。

ここで公共交通機関が考察されるのは、その巨視的な効果—移動可能な範囲の量と速度が増すにつれ、交流可能な範囲が拡大し、こうして小規模な、地縁的な共同体の内部に限定されぬ人間関係の構築を可能にする—においてではなく、その微視的な効果—街路を移動する車体の内部における、人々相互の関係に及ぶ影響—においてである。移動する車体の出現に伴い、車内空間が新たに構築される。そこで各人は、目的地に着くまでの限定された期間中、座席や手摺の傍などに一定の位置を占める。見知らぬ者を目の前にして、人は互いに黙り、留まるよう強いられる。

ジンメルは、そこでは視覚の働きが優勢になると述べるのだが、このことについては厳密に考察する必要がある。確かに車内では、少なくとも互いに言葉を話し聞く遣り取りは稀となり、その限りにおいては相対的に目の役割の比重が高まると言える。だからといって、目の役割が、互いに見つめあうという直接的で純粋な相互作用において高められると考えることは、はたして的確だろうか。この場合、目が向かうのは見知らぬ者に対してである。互いの顔に表れたその者の本質を伝達しあうという見つめあいの働きはむしろ、声を聞く耳と同様低落すると考えるべきではなかろうか。目の働きが比重を増すのは、次のような意味においてであると考えることができるだろう。すなわち、混雑状態—それも路上における、すれ違いつつ移動する余地がありそれゆえ凝視しなくてもやり過ごせる状況と異質な留まり続ける混雑状態で、眼前の見知らぬ者をいかにして見つめないでいられるか、つまりは、個々人固有の本質を相互に伝達するという目の役割をいかにして抑止するか、こういったことが要求される状況においてであると考えることができるのではなかろうか。

ジンメルは目について、人各々の個性的な特徴だけでなく、それらに共通した、同じものを把握する働きもまた備わっていると述べている²²⁾。先までの考察を踏まえつつ、この見解を敷衍するなら、目は、個々人に共通なものを把握し、それを手掛かりにして本質の把握に向う。見つめることの直接性と純粋

性、および双方向性の度合いが高まるにつれ、より個的なものが見えてくると考えられよう。個的なものを互いに把握しあう働きは見つめあうことにおいて発揮される。それとは逆に、ちらっと見ることで、つまりは非凝視においては、共通のものと同じもの、類型的なものが把握されると考えられる。

公共交通機関の車内において求められるのは、この非凝視である。すなわち、目の働きが優位となるのは、凝視せぬ働きの比重の高まりにおいてであると、ジンメルの考察を補足すべきであると考えられる。

目の働きは、見つめないこと、見られる相手の類型把握にとどまることに制限される。この制限下にて、目は耳に比し優勢となる。このことと相俟って、耳の聞く働き、すなわち目による把握が偏見に陥ることを是正する働きが相対的に減じる。ではこの帰結はどうなるだろうか。と、このように、ジンメルの見解については、なお一層考察を展開することが可能である。さらなる詳述は別稿へと譲ることにする。ここでは最低限、確認しておくべきことを二つ挙げ、本稿を終わらせることにする。

①ジンメルは、大都市における車内空間の出現の微視的な効果、すなわち、一定時間見つめあうことなく直に言葉を遣り取りすることもなく対面する状況を、個人の集まりにもたらすという効果を指摘する。②こういった集まりに特有な相互作用形式における個人は、「生活総体における方向感覚の喪失、孤立、いわば四方から、閉ざされた門により囲まれるという感情」(Simmel [1908→1999:727=1999:252-253 (下)])に陥ると把握される。ここにも大都市特有の空間条件による社会的相互作用の変容、相互疎隔が見て取れる。

ジンメルは、都市における車内空間の出現に、こういった相互疎隔の状態の端緒があると指摘する。この指摘については、その論理的帰結を導き出すべく、さらに広く現代的な問題状況へと置き換え、論じ直していくことが可能であると考えられよう。ビックフォードが論じるゲッター等の疎隔空間は、住民の心的傾向、制度の問題とされるのに対し、ジンメルが指摘する車両空間の疎隔効果は、高速長距離移動を可能とする技術的発展がもたらす副産物であると言えよう。すなわち、利用者の心的傾向や交通

制度の問題ではなく、新たな空間の出現による物的環境条件の変化に応じた効果である。また、前者においては、外からの疎隔、内にての同質化が志向されるのに対し、後者においては、外からは移動している一定時間疎隔され、さらに内にて相互疎隔が進行する。この違いにも留意しておく必要がある。

(本稿に引用した外国語文献中、邦訳のあるものについてはそれを参照したが、適宜改変した。)

注

- 1) 『社会学』の第九章「空間と社会の空間的秩序」の原型が、「空間の社会学」と「社会形態の空間への投影」と題された論文であること、さらにこれら論文がともに1903年に書かれていること、つまりは「大都会と精神生活」が書かれたのと同時期のものであるという事実については、フリズビーにより指摘されている (Frisby [1992:98])。これらは、Suhrkamp Verlag 発行の全集、第八巻所収である。なお本稿で扱われるのは「空間の社会学」が成す前半部である。
- 2) 『社会学』でも「大都会と精神生活」でも、ジンメルは、大都会 [Großstadt] と都市 [Stadt] の語をほとんど同義で使用している。また、それらと区別されるものについては小都市 [Kleinstadt] の語が用いられている。大都会の語が用いられるのは、殊に小都市との区別を明瞭とする必要がある箇所においてであるが、都市の語の代わりとして用いられる場合もあり、厳密な用法があるとは考えられない。本稿では、この用例に従い、大都会の語と都市の語を特に区別を設けることなく用いることにするが、原則として都市の語を中心に用いることにする。
- 3) 筆者のこういった論法は、たとえばフリズビーが論文中で紹介している「ジンメルがドイツの大都会に興味を抱いたのは、それを政治的な決定が行なわれる所、あるいは国家の中心と見なしたからではなく、むしろ、多様性および矛盾が展開してゆく所の典型例として、あるいは意識の新しい量および感覚的・知的生活の新しい韻律が現われている場所と見なしたからであった」 (Frisby [1992:116]) という見解に照らしてみても、不適なものではないと言えよう。
- 4) たとえばローマについてはこう述べられる。「ローマという都市の像において、目的をめざす人間の営みが幸運な偶然によって一つに結ばれ、予期せぬ新たな美を生み出すさまが、この上ない魅惑を獲得しているように思われる。ここでは数限りない世代また世代が、連なり合い重なり合って、仕事にいそしみ建設に励んだ。そのいずれもが、自分の眼の前にあるものには何の顧慮も払わ

ず、それどころか、時には何の理解も持たずに、ひたすらその時々必要と当代の趣味なり気まぐれなりに献身していた。古いものと新しいもの、荒れはてたものと元のままに維持されたもの、調和的なものと不調和なもの、そこからどんな全体的形式を生ぜしめるかは、もっぱら、まったくの偶然に委ねられていた。にもかかわらず、全体は測りがたい統一性をそなえ、さながら明確な意志がその諸要素を美のために結集したかのように見える」 (Simmel [1898→1992:302=1999:28-29])。こういった考察には、その時々行為の具体的な内実を顧みず、偶然的な要素をあらかじめ極力除きプランをたてる近代的な都市計画の発想を批判する視点が既に含まれていると言えるのではなかろうか。

- 5) こういった検討を行なったものとしては、Borden の論文が挙げられる (Borden [1997])。これは、ジンメルの空間論を、近代、貨幣、分業、および、距離、境界、密度等、そこに用いられている主要な概念についてフリズビーの研究等に依拠しつつ概略的に検討を行なう論文であり、的確な見取り図的なものとしては示唆的である。また結論部では次のように述べられる。「ジンメルの空間概念は、空間について最近行なわれている都市地理学的な論述、すなわちたとえばソジャによる、空間性 [spatiality] についての、社会的に生産された空間の社会的な質という定義と適合している」 (Borden [1997:328])。あるいは「空間と都市についてのジンメルの考えは、視覚、モダニティとポストモダニティ、建築学的な空間と経験、世界博覧会、身体、ジェンダー、アイデンティティ、マルクス主義、さらには社会空間的メタ理論といった複合的かつ学際的な議論に組み込まれている」 (Borden [1997:329]) と。あるいは Allen [2000] の論文も、貨幣論や人文地理学についてなされた今日的な研究—たとえばデイヴィッド・ハーヴェイによる研究—の文脈にジンメルの論を位置付けようという概略的なものではあるが参考になる。ただしこれらにおいて行なわれるのはあくまでも、ジンメル思想における空間概念の略述であり、それを都市特有の社会的相互作用概念との関わりにおいて論じるという本稿の目的からすると、補助以上のものではない。また、両者の論文に共通の目論見、すなわちソジャやハーヴェイなど、アンリ・ルフェーブルの影響下にある論者のラインにジンメルを位置付けようという目論見の適否については、別途考察する必要があるだろう。そもそも、社会的に生産される空間という概念が、ジンメルに見出せるのか、見出せるとしたらどこにおいてか、あるいはもしも見出せぬとしたら、それは何故か、こういったことをも含め慎重に考察する必要がある。
- 6) 「枠は構成体のそれ自身へ後退する境界であり、社会的な集団にとっては芸術作品にとってときわめてよく似た意義をもつ。芸術作品において枠は二つの機能をはたすが、おれは本来はたんに唯一の機能の二つの側面にす

ぎない。すなわち芸術作品を周囲の世界にたいして閉ざすとともに、またそれを自らのなかに閉じこめもする。枠が知らせるのは、枠の内部にはたんに自己の法則のみに従順な世界があり、この世界は周囲の世界の規定と運動のなかへは引き入れられないということである。枠は芸術作品の自足的な統一性を象徴することによって、同時におのずからその統一性の現実性と印象とを強化する。こうして社会も、その存在空間が鋭く意識された境界によってとり囲まれていることによって、内的にもまた共属するものとして特徴づけられる。」(Simmel [1908→1999:694=1999:222-223 (下)])

7) 原文は、Jacobs [1961→1992:30]。

8) 「現代の都市型社会には、人間の歴史における他のどのような社会にもまして、接触とコミュニケーションが豊富にある。…(中略)…一人当たりの接触は、より多くなり、かつその種類も増加している。個々人は、いまだかつてないほどに広大な世界と接触している。大都市の領域が拡大するにつれ、社会はより一層分化し、接触の数も種類もより増加する。このようなことは、人間の歴史の総体において、いまだかつて起こったことはない。すばらしいことだ。」(Alexander [1967:61 = 1967:46])

9) 「接触数の総体が増大するにつれ、誰かしら特定の人との接触は短くなり、頻繁でなくなり、そしてより浅くなる。ついには、人間的な観点からすると、それらはまったくつまらないものとなる。」(Alexander [1967:61 = 1967:46])

10) アレグザンダーは論文の最終章にて述べる。「都市環境に幾何学的パターンをどれほどつくろうとも、都市自体がもっている病根を克服できないのはもちろんである。この病気は巨大な社会的、心理的問題をはらんでいる。人がその生活方式を変えようと決心したときのみ解決できるであろう。しかし一方では物理的環境をも変えていく必要がある。生活方式を変えようとする人間の努力を物理的環境が助けるときに、はじめて実現できるものである」(Alexander [1967:86 = 1967:81]) と。そして彼は、生活方式の変革可能性を、心的態度への働きかけにおいてではなく、物理的環境の変革によるサポートにおいて見いだそうとし、そのための案を提示する。それはたとえば「すべての住宅は、車の通るすぐわきにある。もし数階建の集合住宅(アパート)であったならば、住居への入口のある各階に、車の通る道がなければならぬ」(Alexander [1967:87 = 1967:83]) といったように、後の著作『パターン・ランゲージ』に結実する以前の、萌芽的なものである。ただし、心的態度そのものを、どういった方向へと変えてゆくかについてのビジョンは、十分に示されていない。このビジョンがしっかりしていないと、サポートの方途もやはり、不十分であると筆者は考える。このアレグザンダーの考えについては、別途論じる必要がある。

11) 「アーレントの著作において枢要なことは、共に行い

議論し得る諸行為、誰が行っているのかは重要でない諸行為に、読者を集中させることである」(Sennett [1992:137])。重要とされるのは、共に営まれる行為の内実なのである。

12) こういった意味での共感能力はアーレントには見られぬと、セネットは言う。「アーレントの著作では、匿名性が、毅然とすること、強いこと、断固たることと等値される。そしてそれらは自己一拘泥 [self-involved]、および閉ざされた主観性の脆弱ぶりと対置される。彼女は共感の力を度外視した。アーレントは、相互に気遣うためには、アイデンティティを共にすることが欠かせぬと信じる者と正反対の、しかしながら等価的な極にいた。彼女は、他の者と、アイデンティティを共にすることと結びつく地縁共同体的な感情、すなわち暖かさ、静かな語らい、交感を拒否した。」(Sennett [1992:140]) 共感能力は、晒されることを恐れる者の、自己拘泥の態度からは育たない。またそれは、地縁等を同じくする者同士の、アイデンティティの共有と異なる。アイデンティティを共有しない者同士の遣り取りにおいて、異質なものを受け入れる態度において共感能力育成は可能となる。つまりは、自己拘泥の状態を脱することが欠かせない。けれども、この自己拘泥、あるいは共通のアイデンティティを求める態度を弱い状態と見なし、過度に拒むとどうなるか。セネットはそこに、共感能力の喪失を見る。すなわち、自己拘泥を過度に拒むと、逆にそうする者としての自己規定力が強くなりすぎて、共感するのに欠かせぬ態度が弱くなる。その限りにおいては、アーレントは、自身が拒む者らと反対側に居ようでありながら実は、等価であるということになる。すなわち、自己拘泥を拒む態度が硬化して、それが逆の自己拘泥 - 自己規定となりかねない。共感の可能性は、その間にあると考えることが出来るだろう。

13) あくまでもこれは、セネットの議論から導き出し得る極論である。彼はあくまでも、思いもよらぬことに対し、それを過度に危険な不安定要因と見なして拒み内へと引きこもることを諷めているのであり、自棄的な態度を勧めているのではない。たとえば彼は言う。「都市は、中心付けられた生活 [centered life] を営むことを学ぶための学校であるはずだ。無数の他者へと晒されることで、我々は、何が重要であり何が重要でないか、見極めることを学ぶだろう。我々は、街路やあるいは他の人々における諸差異を、脅威としてでなく、感傷的な誘いとしてでもなく、必要なビジョンとして見るべきだ。それらは我々にとって、個としても集団としてもバランスのとれた生活を送るのを学ぶのに必要である。(強調は筆者)」(Sennett [1992:x iii]) 一時の感傷に我が身を委ね、自棄的に事を起こすのは、無数の他者へと晒される中、過度に外へと出ることを意味する。それではそこに埋没し己を見失いかねない。自棄の態度は、内へと過度に引きこもることの対極に位置する。その限りではやはりバラ

ンスは失われていると言えるだろう。

- 14) ビックフォードが地域的排他性の代案として提起するのは、中央集権の強化ではない。彼女は述べる。「都市・郊外空間は、一つの明瞭なアイデンティティを持つよりも、曖昧 [fuzzy] で、多様に折り重なった状態 [multilayered] になるべきである。ワイハーの仕事 (1991, Weiher R. Gregory. "The fractured metropolis: political fragmentation and metropolitan segregation", New York: State University of New York Press.:筆者補足) は、政治的境界線を錯綜させることにより、異種混雑性と複雑性が促進されると示唆する。重なり合い [overlapping] が重要なのは、このことだけに限らない。ジェーン・ジェイコブスが、長いこと論じているように、都市の中心においては、居住空間と商業空間を互いに疎隔し《境界の空白状態 [border vacuums]》をつくりだすのではなく、混合的に使用される空間を据えるべきなのだ」(Bickford [2000:369=2001:20-21]) と。異なる地域が互いに疎隔された状態は、包括的統合すなわち画一化によってではなく、多様なままに錯綜させて重ね合わせ、広域的 [regional] 連合体を作り出すことで解消する方向を目指すべきということになる。なお、都市における境界の役割については、ジェイコブスによりこう述べられる。「境界の空白状態という現象は、都市デザイナーを当惑させる。とりわけ都市の賑やかさ、多様性を、率直に価値あるものとし、死んだ状態、節操のないスプロールが厭な者を当惑させる。彼らは時折、次のように推論する。境界は、集約度を高め、都市にはっきりした明確な形式を与える、中世の町の壁のように。これは、もっともな考えである。なぜなら、境界は疑いようもなく、都市の領域を集中化し、集約化するからだ」(Jacobs [1961→1992:262]) と。ここで言われる境界は、疎隔をもたらす壁と異なる。疎隔の壁はむしろ、境界を空白化するものと類似した性質を持つと考えられる。
- 15) 「典型的な大都会生活者—それは当然千差万別であるが—は、外界の激しい流れと断絶により脅かされて根無し草となることに對し、保護装置をつくりだす。彼は、感情ではなく、むしろ本質的に理知をもってこれらに對抗しようとするのである。」(Simmel [1903→1995:117=1999:176])
- 16) 共感、無関心、反発と、この三段階で現れるものを概括する言葉を、ジンメルは用いていない。すなわち、感情とは異なるが、意識にはのぼらないもの、かつ、他人との関わりにおいて生じるもの、これを指示する概念用語は「大都会と精神生活」を読む限りにおいては、見いだせないのである。ここでは、便宜上、感情と区別して情動 [Affekt] の語を使用する。なお、この情動の語については、『岩波哲学・思想事典』(廣松渉他編)の780頁にて、次のように説明される。「カントは感情一般を快・不快の感情と情動 (Affekt) と欲情 (Leidenschaft) とに分け、情動を感覚による不意打ち、欲情を習慣性の支配

的な欲望と捉え、後者に関しては狂気と同様自由を奪うものとして否定的に評価した」と。感情の深みから発する反応とは異質であり、不意打ち的に生じるという概念規定は、本稿の文脈に適合していると考えられる。なお、この事項の参考文献としては、カントの『人間学』(=『カント全集・14巻』, 山下太郎・坂部恵訳, 理想社, 1986年)が挙げられている。そこにて展開される、情動と欲情との区別についての議論は、次の理由で興味深い。「情動とは、心の落ち着き(自分を支配する心 animus sui compos)が失われるような、感覚による奇襲である。情動はだから性急である。すなわち反省を不可能にするような感情の度合いにまで、急速に高まる(無思慮になる)。」(218頁)この定義は、本稿にて展開中の、都市生活者特有の心的傾向に適合していると言えるのではなかろうか。また、欲情についてはこう述べられる。「欲情は最も冷静な反省とも結合せられ、したがって情動のように無分別のものであるには及ばず、それゆえ荒れ狂う一時的のものでなくて、根をおろし、理屈とも共存しうるものであるから、一自由を最も大きく毀損するものであり、情動が酩酊であるとするれば、欲情は病気である。この病気はあらゆる薬剤をきらい、それだけに前述のあらゆる一時的な心の動揺よりもはるかに悪いものである。一時的な情動は少なくとも、よりよくなろうとする企てをひき起こす。ところがそれに代わって欲情の方は、改善をも拒絶する心の迷いである」(237-238頁)と。あるいはさらに簡潔に「情動は正直で開放的であるが、欲情はこれに反して狡猾で陰にこもっている」(219頁)と述べられる。こういった欲情の定義には、やはり、本稿にて述べた非一都市的生活者に特有な心的傾向と類似したものを見出すことが可能であると、筆者は考える。このように情動と比べて欲情を悪とみなすカントの議論に、都市生活者の姿を見ることができのではなかろうか。ちなみに、本書の解説部にて坂部恵は、カントがケーニヒスベルク社交界の常連であったと述べ、『人間学』には社交家カントの姿がよくあらわれていると指摘しているのだが、こういったところからしても、カントの議論は興味深いのである。

- 17) ジンメルが都市特有と考えるこの社会化形式については、次のような見解がある。「大都会は、小規模な集団のポジティブな媒介と正反對の、ネガティブな媒介の構造である。それは、脱構築された共同体、すなわち、人々がもう、生活の共有された焦点を分かち合うこともなく、共属していると認めることもなく、また、行動と気質の実質的な標準をお互い保持しそこへと参画することもなく、お互い面と向かい合わねばならぬ、そのような共同体である。それは、不条理な社会、生活の、いかなる統合的な意味をも欠いた、反一絆 [anti-bond] としての社会的絆である。」(Weinstein [1993:122])ここでは、共同体における統合的な意味の喪失を見出した者の先駆けとして、ジンメルが把握されている。

- 18) 「合理的に確定された都市定住の、自然なままの部族的思考との対立」(Simmel [1908→1999:713-714=1999:240 (下)])。被構築性は、合理的に確定されることとほぼ同じ意味であると考えられる。
- 19) ジンメルが用いる合理性概念の意味をより一層明瞭とするに際しては、カッチャーリの次の説明が参考になる。「神経生活が想定する合理的秩序は、政治的領域にも影響を及ぼす。大都会の状況においては、革命的な過程は、トクヴィルが示す次のような見聞の意味で、完全に知的である。「わたしは、午後の全てを、パリ周辺を歩き回って過ごしたのだった。そして私は、二つのことに衝撃を受けた。第一に、革命の、極めて民衆的な特質…(中略)…人民の全能…(中略)…そして第二に、憤りの感情の少ないこと、実際に、いかなる憤りの感情も、そこには無かった。」最終的な分析において、階級利益が設定されたその幾何学的な明晰さゆえに、すべての可能な目的論、あるいは倫理的・感傷的な綜合は除去される。そしてその明晰さは大都会にのみ宿るのだ。」(Cacciari [1993:6])
- 20) こういった空理の代表としては、クリストファー・アレグザンダーが有名な論文、「都市はツリーではない」においてツリー的であると批判した、都市計画の論理を挙げる事が出来るだろう。
- 21) またカッチャーリは、ジンメルの、「大都会の機能は、この双方(個人とそれを圧する分業体制:筆者補足)の闘争と和解のための場を設けることである」(Simmel [1903→1995:131=1999:199])という見解に予定調和的な視座を見出しそれをも批判する。これは、分業体制に組み込まれている状態において、失業することなく、より多くの賃金を獲得すべく互いに闘争している個々人を、大都会という開かれた場において自由に遣り取りしその関わりにおいていずれは互いに和解する者へとすりかえる論理であるとカッチャーリは批判するのである。すなわち、「分業が普遍化し、そこで個人は個性的な自由を求める者として成熟するにつれ、平等を要求するようになる。けれどもその平等は、見いだされた個性が、まさしくそこで生きると想定される平等である」(Cacciari [1993:11])と。このように個性と平等とを相関させる論理においては、分業は個性の伸張を促進する社会的仕組みであるという誤認、および、自由に個性的であろうとする者は、いずれお互い平等な関係において和解し、さらにそこでは自由と平等のいずれをも可能とする理想的な共同体が成立するという幻想が見いだされる。また、こういった側面が強調されると、都市を「根本的な矛盾をはらむ構造」(Cacciari [1993:10])として考察することが困難になる。本稿では、都市特有の神経生活に対する適応態度の二類型の対立を提示したのだが、上記の論理に従うならば、この対立もいずれは和解するという、楽観的で予定調和的な錯誤に陥りかねないことに注意すべきである。

- 22) 「ごくわずかな人間しか、友人の目の色がどうであるかをさえ確実には言えないし、あるいはごく近くにいる人の口の形をまざまざとは思いつかべることもできない。じつのところ彼らは、彼らをまったく見ていなかったのである。人は明らかに人間において、一般的なものを聞くよりもはるかに高い程度において、彼と他者に共通するものを見るのである。(強調はジンメル)」(Simmel [1908→1999:732=1999:257 (下)])視線は相手に向けられているが、その者の個的なものの把握にいたることはない。この非凝視においては、当の相手が、一般的に類型化可能な対象として把握されると述べられる。

主要参考文献

- Alexander, Christopher, 1967, "The City as a Mechanism for Sustaining Human Contact" in *ENVIRONMENT FOR MAN*, ed. by William R. Eward Jr, Bloomington: Indiana University Press: 60-109. (=1967, 瀬底恒子訳「ヒューマンコンタクトを育てる都市」, 『都市と人間』, 日本生産性本部: 44-99.)
- Allen, John, 2000, "On Georg Simmel: proximity, distance and movement", *Thinking space*, eds. by Crang, Mike and Thrift, Nigel, London and New York: Routledge: 54-70.
- Bickford, Susan, 2000, "CONSTRUCTING IENQUALITY: City Spaces and the Architecture of Citizenship", *POLITICAL THEORY*, 28 (3) : 355-375. (=2001, 池田和央訳「不平等の建設」, 『思想』, 岩波書店, 931 : 4-31.)
- Borden, Iain, 1997, "Space beyond: spatiality and the city in the writings of Georg Simmel", *The Journal of Architecture*, 2 (4) : 313-335.
- Cacciari, Massimo, 1993, *Architecture and Nihilism: On the Philosophy of Modern Architecture*, trans. by Sartarelli, S, New Haven and London: Yale University Press.
- Frisby, David, 1986, *Fragments of Modernity: Theories of Modernity in the Work of Simmel, Kracauer and Benjamin*, Cambridge: The MIT Press.
- Frisby, David, 1992, "Social space, the city and the metropolis", *Simmel and Since: Essays on Georg Simmel's Social Theory*, London and New York: Routledge: 98-117.
- Jacobs, Jane, 1961→1992, *The Death and Life of Great American Cities*, New York: Vintage.
- Kracauer, Siegfried, 1963, *DAS ORNAMENT DER MASSE*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=1996, 船戸満之・野村美紀子訳『大衆の装飾』, 法政大学出版局)

- Lukács, Georg, 1911→1971, *Die Seele und Formen*, Darmstadt und Neuwied: Sammlung Luchterhand. (=1986, 川村二郎ほか訳『魂と形式』, 白水社.)
- Sennett, Richard, 1992, *The Conscience of The Eye: The Design and Social Life of Cities*, New York: W. W. Norton&Company.
- Simmel, Georg, 1890 → 1989, *Über sociale Differenzierung*, *Gesamtausgabe 2*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag: 109-295. (=1970, 居安正訳『社会分化論』, 青木書店: 1-173.)
- Simmel, Georg, 1898→1992, “Rom. Eine ästhetische Analyse”, in *Aufsätze und Abhandlungen 1893-1900*, *Gesamtausgabe 5*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag: 301-310. (=1999, 川村二郎訳「ローマ 一つの美学的分析」, 『芸術の哲学』, 白水社: 26-44.)
- Simmel, Georg, 1903→1995, “Die Großstädte und das Geistesleben,” in *Aufsätze und Abhandlungen 1901-1908, Band 1*, *Gesamtausgabe 8*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag: 116-131. (=1999, 川村二郎編訳「大都会と精神生活」, 『ジンメル・エッセイ集』, 平凡社: 173-200.)
- Simmel, Georg, 1908 → 1999, *Soziologie: Untersuchungen Über die Formen der Vergesellschaftung*, *Gesamtausgabe 11*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (=1999, 居安正訳『社会学』(上)(下), 白水社.)
- Simmel, Georg, 1917→1999 *Grundfragen der Soziologie*, *Gesamtausgabe 16*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag: 61-149. (=1979, 清水幾太郎訳『社会学の根本問題』, 岩波書店.)
- Weinstein, Deena and Weinstein, Michael A. 1993, *Postmodern (ized) Simmel*, London and New York: Routledge.